



学長の諮問機関である運営諮問会議は学外の有識者10名で構成されています。その運営諮問会議の最近の答申によると、山口大学が学外向けに刊行する印刷物を現在の3分の1に減らすことが提言されています。3分の1に減らすということは3分の2は止めてしまえということです。何とも過激な提言だと思いますが、運営諮問会議の言わんとするところは、3分の2を止めることによって浮いた時間と労力で新たな広報活動を行えということです。本誌・YU Informationは残すべき3分の1に入るのでしょうか？あるいは止めるべき3分の2に入るのでしょうか？後者であるとすれば私たちはこれまで無駄なことをやってきたのでしょうか？そして読者は無駄なものを読まされていたのでしょうか？

山口大学の広報活動は広報活動専門委員会が担当するYU Informationの編集・発行やホームページの編集・管理などの他に、各学部などが独自に行う広報活動もあります。これらの活動は印刷物やホームページによるものだけでなく、学内外での各種の催し物の開催や、高校生を対象とした体験入学の受け入れや出前講義など広範多岐にわたっています。

本号では特集としてこれらの広報活動の実態を総括するとともに「3分の1提言」も踏まえて将来展望なども考えてみたいと思います。まず大学全体としての広報活動を担当する広報活動専門委員会より全学の広報活動について述べ、その後各学部の広報担当委員会よりそれぞれの学部の広報活動について報告します。

学部以外にも共通教育センターや附属図書館、その他各種の附属施設においても、それぞれ独自の広報活動がなされていますが、本号においては残念ながら取り上げることができませんでした。

「知の広場」の「輝く個性」を伝えるために



小宮 克弘
広報活動専門委員会委員
理学部教授

新しい委員会

山口大学では本年4月より学内の各種委員会が再編成されました。これに伴い大学の広報活動を担当してきた旧広報委員会は、広報活動専門委員会と名を変えて引き続き広報活動の実務を担当することに

なりました。委員の構成は各学部および附属病院から選出された教官など11名で構成されています。事務サイドから総務部企画・広報室の協力があります。

新しい広報活動専門委員会が旧広報委員会から引き継いで行うことになった広報活動にYU Informationの編集・発行とホームページの編集・管理があります。まずこれらについて紹介したいと思います。

YU Information

YU Informationは平成4年に創刊された山口大学の広報誌です。隔月で発行し、本号で55号になります。学内へ4200部、学外(文部科学省、他大学、高校、地方自治体、企業)へ2500部配布しています。創刊当初は10頁前後でしたが、その後次第に頁数が増え、最近ではほとんどの号が50頁を越えています。

いつの頃からか毎号特集記事を組むようになり、その特集内容について各学部が推薦する教官(あるい

は学外有識者)が執筆し、これらの記事を連ねて特集とするというやり方を踏襲してきましたが、最近では座談会、あるいはインタビュー形式の特集も組むようになりました。

「私の研究」や「私の授業」は創刊号以来の連載記事です。毎号それぞれ1ないし2名の教官が自分の研究あるいは授業について紹介しています。「トピックス」あるいは「コラム」では学内の最近の出来事などを伝えています。

YU Informationを学内の教職員や学生へ向けての学内相互の連絡案内としての広報誌として位置付けるのか、あるいは学外の読者に対して山口大学の現状を紹介する広報誌と考えるのか、創刊以来、編集に当たる者たちが常に迷ってきた問題です。どちらの広報活動も重要ですが、YU Informationによる広報のターゲットはどちらに置くべきか、前出の「3分の1提言」とからめて後述することになります。



ホームページ

山口大学を紹介するホームページがインターネット上に初めて発信されたのは平成6年のことでした。多くの大学がそうであったように、山口大学においても当初は一部の学生と教官の同好グループによる私的で趣味的な広報活動でした。しかしその広報活動が次第に公的情報も流すようになってくると、大学当局としてもホームページによる広報を公式な活動として認知し、広報内容に責任をもつ必要が生じてきました。そのためにこのホームページの管理・運



営が平成10年、同好グループより当時の広報委員会に移管されました。

現在の山口大学ホームページは広報活動専門委員会が編集・管理するトップページを頂点として、その下に各学部のページ、さらにその下に学科や研究室が編集するページなどがくるようなピラミッド型の階層構造を念頭においたリンク網で構成されています。ピラミッドの中腹のページを見たいときでも、ピラミッドの頂点よりリンクを繋いでいけば容易に目的のページにたどりつけるはずです。

各学部が編集・管理するホームページについては各学部からの報告が後述されますが、ここでは全学の広報活動専門委員会が編集・管理するページについていくつか紹介したいと思います。

「学長ご挨拶」のページは学長の動画と音声付きです。学長自らが肉声で語りかけるホームページは、筆者の知る限りでは山口大学しかありません。「山口大学の人・知・技」では山口大学の約2400名の全教職員を紹介しています。研究内容などを紹介する教員だけの同種のページは他大学にもありますが、事務系職員や附属学校の教諭、附属病院の看護婦なども含めて文字通り大学の全教職員を紹介するページは山口大学の他にはありません。「写真で見る山口大学の歴史」は山口大学創立以前の旧制高校の時代から現在にいたるまでの歴史を約300枚の写真でたどることができます。きつとなつかしい写真に巡り会えるはずです。

ホームページ上でYU Informationを読むこともできます。



「山口大学の先生」

平成9年に「山口大学の先生」を刊行しました。これは山口大学のほぼすべての教員から寄せられた原稿をもとに編集し、約400頁からなるいわゆる研究者総覧です。この種の総覧は研究内容や研究業績の羅列に終始し、固い内容になりがちですが、「山口大学の先生」は各教員の研究者としての生身の人間像を伝えることに主眼を置き、自己PRとして特技、モットー、お国自慢なども書かれています。マスコミ等でも紹介され、学外でも大きな反響を呼びました。

いくつかの検討課題

上述してきたようにこれまでの広報活動専門委員会の広報活動は印刷物とホームページによる2本立てですが、印刷物による広報はホームページによる広報で代替できるのではないかという意見も一部にあります。果たしてそうでしょうか？印刷物とホームページの広報媒体としての利便性や広報効果の違いについて、今後検討してみる必要があると思います。さらに印刷物、ホームページ以外の媒体の開拓も考えていかねばなりません。

後述するように各学部においても、それぞれ独自の立場から広報活動が行われています。広報活動専門委員会の直接の担当ではありませんが、全学規模の広報として入試関連の広報や学生の就職関連の広報もあります。これらの広報活動を全学の広報活動専門委員会の下に一元化したらどうかという話も時々聞きます。しかし就職関連の情報は学生生活課にあ

り、入試関連の情報はアドミッションセンターや入試課にあり、また入試、就職を含めて各学部固有の情報はそれぞれの学部にあります。広報活動専門委員会がこれらをすべて把握し理解しているわけではありません。そういう状態で大学の広報活動を一元化しようとするためにはどんな方法が考えられるでしょうか？このことも今後の検討課題であると思います。

再びYU Information

本特集の冒頭で「3分の1提言」について述べましたが、これはYU Informationを存続させるか廃刊にするのかのAll or Nothingの選択を考えるのではなく、頁数を3分の1に減らす、あるいは現在6回の発行回数を2回に減らすという選択も提言に応える道ではないかと思えます。

YU Informationは学内向けの広報誌であるのか、あるいは学外向けの広報誌であるのか、創刊号以来そのターゲットを絞りきれないまま現在に至っているということを既に述べました。年6回発行のうち、学内向けを2回、学外向けを2回、そしてあとの2回をこれも学外向けですが、とくに学生の保護者向けにしてみてもどうでしょうか？私事ながら筆者自身も大学生の子をもつ親として、自分の子供が通う大学の現在の活動の様子を知りたいという需要は多いと思えます。

何らかの形でYU Informationが残すべき「3分の1」に入り、今後も発行を続けていくためには、これまでのようにほとんどの記事の執筆を広報活動専門委員会の外に求めるのではなく、委員会の委員全員が自ら取材をし、自ら筆を執るという意気込みも必要ではないかと思えます。

最後に

平成10年、文部大臣の諮問機関である大学審議会は、21世紀の目指すべき大学像として「競争的環境の中で個性が輝く大学」を提言しました。これを受けて学内に設けられた教育理念・目標検討ワーキンググループは学長の諮問に応じて昨年、山口大学の理念と目標は「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」であると高らかにうたい上げました。

「知の広場」の「輝く個性」を学内外に広く伝えることが、山口大学の広報活動の使命であると考えます。

地域で学ぶ、地域から学ぶ —人文学部の新しい活動—



高橋 征仁
助教授
人文学部人文社会学科

「なす」が表紙の『人文学部紹介』

昨年度、人文学部の広報委員の一人として、『人文学部紹介』の作成と公開講座を担当しました。「人文学部紹介」のキャッチコピーは、「風はルネッサンス」から「なぜ学ぶ、何を学ぶ、どう学ぶ」への変更がすでに決定されていました。問題は、新しいキャッチコピーに合った新しい『人文学部案内』のデザイン・編集をどうするのかということでした。当学部で社会人学生をしていた山本周作氏(平成12年度卒)にお願いして、結局、2つの表紙案を作成しました。1つは、『不思議の国のアリス』や『モモ』の挿絵にあるような(?)、「歪んだ時計」をデザインしたものです。もう1つは、「なす」が2つ並んでいる現在の表紙です。

高級イメージの宣伝よりも、親近感を

なぜ、「なす」を表紙に選んだのか？実は、とくに明確な理由や意図はないのです。あえていえば、「なぜ学ぶ、何を学ぶ、どう学ぶ」というコピーのもつ実直さに、「なす」のナチュラルな感覚が妙にじっくりしていたからだけです。また面白いことに、2つの表紙案を出したとき、学部の教官の8～9割は「歪んだ時計」を選んだのに対して、学生の8～9割は「なす」を支持していました。あとから考えると、「歪んだ時計」は、「なぜ学ぶ、何を学ぶ、どう学ぶ」というコピーと一緒に考えると、教官にとっては学問の純粋さや高尚さを、学生にとっては、難解さや敷居の高さを表象してしまっていたようです。この表紙の選択を通じて、期せずして、私は、ブランドよりもフランクさを、高尚さよりも朴訥さを、そしてエリートよりも大衆を、人文学部の広報活動の基本路線として選択してしまっただけです。



「公開講座」「公開講演」

もう1つの担当の「公開講座」は、社会情報論コースの先生方をお願いして、「変容する日本の社会と生活文化～21世紀型社会への展望と課題」をテーマにした6回ものの講座を開講しました。講座終了後、毎回1時間以上も質問や議論が続くという白熱した内容でした。また、「公開講演」のほうは、防府市において、「夏目漱石の文学における<内>と<外>」というテーマで、お二人の先生に講演していただきました。

学生と社会人がともに学ぶ

「やまぐちサタデー・カレッジ」

ただし、「公開講座」は、平成13年度から、生涯学習委員会の新事業「やまぐちサタデー・カレッジ」へと名称・内容ともに大幅に刷新することになります。「公開講座」が大学の講義を地域の人々に「知ってもらおう」という広報の要素が大きかったのに対して、「やまぐちサタデー・カレッジ」は、地域の人々と学生がともに参加して、8～15回の講座を受講するという、「継続的な学習」や「参加」「交流」の要素が強い内容になっております。



地域の要望に応える「出前講義」

また「公開講演」のほうは、今年度の継続が未定ですが、同じく生涯学習委員会の新事業である「出前講義」や「徳山市オープンカレッジ」のほうへ、活動をシフトしていくと考えられます。「公開講演」が、事前に人文学部の用意した講演企画を、教育委員会等を通じて、県内各市町村で実施していたのに対して、「出前講義」や「徳山市オープンカレッジ」のほうは、地域社会や団体の要望に応える形で実施していく点が、大きく異なっています。

地域社会の方々とのフランクな交流を

これらの生涯学習委員会の新事業では、いずれも、地域の人々に一方的に「教える」のではなく、地域の中で「ともに学ぶ」、ときには地域の人々から「教えてもらう」ことが多くなると考えられます。そうした新事業のもつ性格は、『人文学部紹介』の「なす」のデザインともマッチしています。また、新事業は、ともに広報委員会の手を離れますが、人文学部の新しい「広報」活動のスタイルを示す事業であると考えられます。

**広報活動の実態
 人と人の触れあいの広報活動**



福田 隆眞
 教授
 教育学部広報委員

山口大学教育学部では広報活動として、印刷物、ホームページのようなメディアを介したものと、直接に人と人が触れあう大学説明会のようなものも広報として考えています。いずれも教育学部の内容をより広く、正確に、多面的に理解してもらおうものです。以下にそれらを紹介し、今後の展望も考えてみたいと思います。

1 印刷物・ホームページ

教育学部は大学全体の印刷物やホームページによって広報活動を行っていますが、学部独自のものとしては、「教育学部案内」があります。これは、特に高校生を対象としているもので、教育学部の目的・組織・教育内容を広く知ってもらうために教室やコースを具体的に紹介をしています。ホームページも同様に写真や文章によって分かりやすくお知らせしています。

2 人と人の触れあいの広報活動

教育学部では、メディアによる広報活動の他に直接に人と人の触れあいによる活動を行っています。例えば、高校生対象の学部の説明会では、大学生と直接話をする時間を設け、勉強の内容や学生生活全般に亘って教育学部の実態を伝えるようにしています。また、教育学部の附属学校・園では毎年1回以上の研究会を行っています。公立学校・園の先生方が参加され、研究内容を通して教育学部の研究・教育の活動をお知らせしています。

研究や授業を通しての広報活動としては、公開講座や認定講習等もあります。これらは地域への貢献が目的ですが、これらを通してより詳しく教育学部をお知らせしています。公開講座は社会人を対象としたものですが、教育学部の内容を講座を通して広報しています。

学生の活動による広報活動もあります。「フレンドシップ事業」というのもその一つです。これは地域

の学校の児童・生徒と学生が体験を通じて触れあうことを目的としています。昨年度からは阿東町の生雲小学校で15名の学生が1年間に20回くらい訪問して、子どもたちと勉強をしたり遊んだりして、体験を通して触れあいを深めています。こうした活動は広報を目的としたものではないにしても、地道に直接に人と人が触れあうことで、教育学部のことを広めていることとなります。本当の広報とは、表面だけの知識や情報を伝えるのではなく、心の通いあいによって理解してもらうことだと思います。

3 今後の在り方

インターネットによって多くの人に速く情報が届く時代になってきました。教育学部も情報化社会に合わせて、情報メディアによる広報活動を進めていきます。しかしそこから得られる情報は一つのきっかけだと思います。

教育学部の本当の姿を知っていただくためには人との触れあいを大切に、各種の公開講座、講演会、児童・生徒との触れあいの場、研究会、ゼミナール等を積極的に持つことが必要だと思います。



素人集団の「手作り広報」



マルク・レール
助教授
経済学部
情報環境委員会副委員長

日本の大学は、静かに教育や研究に専念するだけでなく、広報にも積極的な働きかけを行っており、最近はマルチメディア、特にインターネットがかつて出来なかった広報活動を可能にしています。経済学部には、毎日毎日、多くの情報が発生しています。一言でいえば、その情報を包括的かつ効率的に「知らせる」ことが現在、広報活動の最大の目的です。しかし、情報あるいはターゲット（受け手）によって、この「知らせ」の形態とレベルが違ってきます。

広義での広報活動を分類すれば、主に在学生を対象とした「学内広報」と、学部外者（卒業生、企業等）を対象とした「学外広報」があります。注目されているのは学外広報ですが、これにはいくつかの目的があります。経済学部は、社会に対して責任を持って、教育と研究の成果、その周辺の動きを発表する義務があります。また、優秀な学生を獲得するためには、ある程度の「宣伝活動」も大事です。ここで、気をつけなければならないのは、「広報」は一方的な「宣伝」とは違うことです。一般の商品やサービスを宣伝する民間企業と違って、経済学部の「すばらしさ」だけを宣伝するのではなく、教育機関として、そして国立機関として責任を持ち、もっと素直な情報活動を行わなければならないと思います。

経済学部広報活動の現状は、ほかの学部とあまり変わりはありません。使用メディアで言えば、年1回の学部案内パンフレットの発行、ホームページの開設、公開講座などの単発的なイベントでのパンフレットの発行、また、従来のマス・メディアへの情報提供を行っています。情報発信源でいえば、経済学部では、情報環境委員会が主に学部案内とホームページを担当しています。しかし、この委員会によって、すべての情報が管理されているわけではありません。

ここで、経済学部でどんな「すばらしい」広報活

動が展開されているかを述べる必要はありません。それより、現在の広報活動の問題点を少し照らし出したいと思います。厳しい言い方かもしれませんが、経済学部の広報活動は素人の「手作り広報」です。限られた予算の元で、教員がプロフェッショナルのマス・メディアなみの仕事をしなければなりません。現在、マルチメディアが可能にした情報活動の高度化、そしてそれに伴う社会の「情報ニーズ」の急速な変化が、この「素人集団」に一層高いプロフェッショナルリズムを要求しています。ホームページを持っているだけで話題になるという時代はすでに終わり、逆に「ホームレス」(HPを持たないこと)であると、評判が悪くなります。ホームページのビジュアル化も全体的に進んでいて、そのペースにも追いつかなければなりません。そして形だけではなく、内容に対する期待も年々高まってきています。

マルチメディアが可能にした情報伝達形態のバリエイターを背景に、経済学部の次の課題は学部案内のCD-ROM化です。紙メディアの必要性もありますが、特に社会に対する責任をもっとよく果たすためには、紙メディアでは不可能な大量のデータを提供しなければなりません。しかし、CD-ROM化の作業もまたわれわれ素人が「手作り」で行わなければなりませんので、正直に言えば、かつてなかったプレッシャーを感じていると同時に、外部の応援、そして盛んなフィードバックを期待しています。

もう一つの課題は、広報に学生の声・視線を取り入れることです。学部案内パンフレットには学生の発言が掲載されていますが、ホームページの情報は非常に固くて、「上からの目線」を感じさせます。しかし、将来経済学部を目指したい高校生にアピールするためには、その目線を下げなければなりません。学生の立場から見た経済学部の情報を従来の広報活動にもっとブレンドすれば、経済学部の生き生きした雰囲気が伝わり、より内容の充実した広報が出来ると思います。



“理学部” 出前します



金折 裕司
 教授
 理学部
 化学・地球科学科

理学部の広報活動は大きく2つに分けられます。1つはパンフレット(理学部紹介—科学する青春を君に—)とホームページを中心とした理学部の最新情報の紹介です。もう1つは、実際に高校生や一般市民を対象とした広報活動で、一日体験入学や出前講義、サイエンスワールドなどを実施しています。

サイエンスワールド2001



サイエンスワールドの開催も今年で3年目を迎え、一般市民の方々にすっかり親しまれるようになってきました。“理学部”を小学生からお年寄りまで、老若男女を問わず、一般の方々に理解してもらおうとする企画です。今年度は3月20日に湯田温泉の山口県婦人教育会館カリエンテ山口で開催され、372名の方々に御来場頂き、スタッフを加えると約450名に及び、大盛況でした。サイエンスワールドの実施にあたってはまず年度初めに、理学部を代表するそうそうたるメンバーから構成される委員会が組織されます。その委員会ではほぼ1年間かけて企画が慎重に検討され、年度末の開催にこぎつけます。

サイエンスワールドの内容は、《講演》と《実演・体験コーナー》、《理学部紹介コーナー》、《科学何でも質問コーナー》、《クイズラリー》など盛り沢山で、参加された方々が楽しみながら科学の最先端に触れることができるとともに、理学部の面白さを感じ取

ることができるように配慮されています。さらに、会場にはパネルコーナーもあり、理学部の各研究室の研究内容が分かりやすく掲示されており、好評を拍しております。《講演》では、実際に研究にあっている理学部の教官が科学の最先端の話題を分かりやすく解説しています。《実演・体験コーナー》では、難しそうな数学や物理現象、物質科学、生物の神秘、地球の変動などが理解できます。そして、日頃不思議に思っている現象などを質問することができます。さらに、参加者が楽しめるようにクイズも用意され、正解者にはその場で記念品を進呈しています。とかく世の中では、理科離れが進んでいると言われていますが、この日ばかりはそのようなことは感じられません。



朝日新聞 H13. 3. 21

一日体験入学と出前講義

この他に、理学部では一日体験入学と出前講義(理学部紹介)、入試説明会などを実施してきています。一日体験入学は県内の高校生を対象として、実際に理学部に来て頂き、理学部の実験や授業を体験してもらうという企画です。この企画も4月に委員会を立ち上げ、慎重に実施内容を検討し、10月に実施しています。実験やコンピュータで作図をしたり、岩石や化石に触れたりできるため大変好評で、コンピュータを使って自分で書いた図を大切に持ち帰る生徒もみられます。これらを体験して理科に興味を沸いてきたという生徒も多く、頭で考えるだけでなく実際に手を使って現象を理解することの必要性が感じられます。この企画は科学の裾野を広げるのに役立ち、体験入学に参加した生徒が我が理学部へ進学してくれる日を心待ちにしています。

県内県外の高等学校から、理学部紹介の依頼が数多くくるようになってきました。平成12年度には6つの高校へ出かけていき、理学部紹介を行いました。さらに、予備校からも入試説明会の依頼があり、実際に出かけていき、理学部に関する情報提供を行

ました。多くの高校や予備校から依頼が増えて誠に嬉しい限りですが、一方ではこのような企画を実行することで一部で過度に負担が増え、研究や教育に費やす時間が減っていることも危惧されます。今後は、研究や教育のポテンシャルを上げつつ、それを如何に一般の人たちに理解して頂き、かつ限られた人員と時間の中で取り組んでいくか、そのバランスを保っていきたいと思っています。



科学する青春を君に

理学部では、《理学部紹介—科学する青春を君に—》というパンフレットを作成し、理学部の研究・教育内容を紹介しています。この小冊子は毎年改訂して、できるだけ最新的话题を掲載する努力をしています。さらに、2年に一度大改訂を行っています。

一方、ホームページでは各研究室(一部は未公開)にリンクできるようになっています。このホームページには理学部が主催する学会や催し物など、ホットな話題も盛り沢山です。現在は、ホームページの英文も徐々に整備されてきています。また、ホームページのiモード版も試験的に公開を始めました。iモード版については、アクセスが多いようであれば、今後充実して行く計画です。

現在、理学部には広報委員会の下に、一日体験入学WGとHP小委員が設けられています。来年度はこの2つのWGと小委員会を再編して、さらに広報活動を強化していくことを予定しています。

☎ & F A X (083)933-5753

E-mail : kanaori@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

医学部における広報活動



武藤 正彦
 教授
 医学部・
 附属病院広報委員会委員長
 医学部
 分子感知医科学講座

1) 広報活動の実態

医学部は医学科および保健学科の二つの学科から構成されており、それに加えて臨床研修の場となる医学部附属病院があります。医学部としての広報活動は、①医学部とはどんな所なのかを知っていただくためのもの、②受験生のための入試情報、③病院案内、④国際交流活動、等々に分類することができます。これらに関する情報伝達手段として、ホームページの開設、パンフレット作成、オープンキャンパス、学務委員の高校訪問、公開講座、就職担当教官による病院・会社訪問（保健学科）、などがあげられます。昨年秋より始まった国をあげてのIT革命の渦中で、医学部でも一般向けの入試情報や医学部附属病院の紹介をインターネット上に公開を開始しました。お蔭様で、全国各地からいろんな病気についての相談なども寄せられるようになりました。

2) 反省

大学からの情報発信が遅れ、社会の持つ課題に十分には応えきれていないと思います。

日本への留学を希望している海外の学生諸君も山口大学のホームページをみていると聞いています。英語でのアピールが益々重要になってきており、山口大学ホームページの英文化が急務となっています。広報活動に専任できる教官の配置も必要となるでしょう。

3) 広報のあり方

広報の手段としては、やはりインターネットを介した情報伝達が早くてより多くの人々にとって有益であると思います。医学部の使命には、教育、研究、診療、そして産学連携を受け入れた新産業創成によ

る社会貢献があります。国際競争に打ち勝つためには全ての知を結集しなければなりません。山口大学の全職員を紹介した「山口大学の人・知・技」が広く社会で活用されることを期待しています。ただし、注意しておかねばならない点は、広報活動も技術革命と称する新産業の創出に関わる面のみに傾注することなく、たとえ採算面では割りが合わなくても社会あるいは人類が豊かになるためのものでもあるべき点という点を忘れてはならないということです。多様な社会の声を聞く手段として利用し、社会が今、大学に何を期待しているのかを知る必要もあります。この点、インターネットはお互いの意見を反映させることができ非常に有用であると思います。従来から重視してきた一方通行型のパンフレット（YU Information）の発行も今後は季刊誌の形でもよいかもしれません。



4) 将来展望

今後、情報発信にあたり、社会に大学の存在を認めさせる広報活動のあり方が問われるでしょう。大学人の意識改革をどのようにすれば良いのか、その解決策も模索しなければなりません。これまでも主張されてきたことですが、大学は地域に貢献するとともに、国際社会への貢献をしていく必要があります。西洋文明を貪欲に吸収してきた明治維新から約140年の歳月が流れ、今ここに次世代の情報革命の時代が始まろうとしています。人と人との触れ合いを尊重しつつ、広報活動はその戦略的手段の中心に位置づけられてくると言っても過言ではないでしょう。

☎ (0836)22-2269

E-mail : mmuto@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

「大学における広報の役割」 ～これまでとこれから～



森田 昌行
教授
工学部
工学部広報・
国際交流委員長

工学部における広報活動

工学部ではここ10年以上にわたって工学部広報委員会が広報活動全般を担当してきましたが、平成13年度より、これまで国際交流関係を担当してきた委員会と合同して「工学部広報・国際交流委員会」が組織され、その活動をいっそう強化することになりました。この委員会は、各学科から選出された15名の委員と、全学の委員(広報活動専門委員会および国際学術活動専門委員会)を兼任する委員長と副委員長、



そして事務担当者2名、総勢19名で構成される大きな組織です。工学部広報委員会のこれまでの具体的な活動を列挙すると、

- 1) 工学部案内(パンフレット、リーフレット、ビデオ類)の企画・編集と発行
- 2) 工学部ホームページの管理・運営
- 3) 高校生向け大学(学部)説明会の企画と運営
- 4) セミナーや公開講座など地域交流に関する窓口業務
- 5) イメージコマーシャル(TVCM)、イメージポスターの企画・制作

- 6) 工学部のロゴ・シンボルマークの制定、マニュアル管理、普及活動
- 7) その他、工学部主催の各種イベントへの協力など

となります。この中で、項目1)～4)はいずれの大学、学部でも担当していることで、さほど目新しいことではないと思いますが、学部単位で5)と6)を実施しているのは国立大学としては全国的にもあまり例がないかもしれません。13年度からは上記に加えて、高等学校への「出前講義」を実施することになり、この窓口業務も「広報」の担当です。また、委員会として国際交流も担当することになりましたので、国際的な広報活動も展開しなければなりません。

広報活動のあり方

平成11年度～12年度に全学の広報委員および工学部の広報委員長を勤めた立場から、以下では大学の広報活動に関する私見を述べさせていただきます。

山口大学の運営諮問会議からの提言にもありますように、これからの大学においては広報活動の重要性はますます高まる一方でしょう。「開かれた大学」というのは、単なる理想像(お題目)ではなく、そうでなければ社会に対する役割が果たせなくなってきているからです。その意味で、13年度からの全学委員会の再編成には大きな期待が寄せられます。

それにしても、限られた「ひと」と「予算」の中で広報活動をどう展開していくかということはたいへん難しい問題です。とりわけ、多くの教職員は「広報」ということに関して「素人」です。いままでは、素人は素人なりにそれぞれの「作業」をこなしてくればよかったのですが、これからはそうもいかないようです。そこで次の2点をまず提案致します。

- 1) 広報担当(教員と職員)にプロを配置すること
- 2) 広報活動に関して企画立案する組織と計画を実行する組織を有機的に配置すること

その結果どのような効果があるか、ということは簡単には申せませんが、1)は、本格的な広報活動をするには必須であること、また2)は、〈現状のような、企画立案と実施を曖昧に兼ね備えた組織では「できることしかしない」状況に陥るか、あるいは逆に、「とにかく忙しい」けれども効果はほとんど現れないという不幸な事態になるからです。

広報活動の展望

さて、13年度も広報活動に携わることになりましたので、今後の展望を述べて終わりにします。

私は、大学における広報活動は大きく3つに分けられると考えています(すでに誰かが言っていることの受け売りかもしれませんが)。第1は「お客」である受験生とその予備軍(いわゆる「入口」)に対して、第2は大学の「出口」につながる一般社会との連携の立場から、そして第3は「本当のお客」である在学生を中心とする大学構成員に向けて、です。

部局によってはこれらの間の比重は違っていると思いますが、広報活動を考える場合はこのことを強く意識する必要があります。本誌「YUInformation」の編集会議ではしばしば「誰のための広報誌か？」



と言うことが議論されてきました。それはそれでよいのですが、広報誌の発行だけが広報活動ではないので、それぞれの活動でこのことをよく考え、適切に使い分けていくことが大切なのではないかと思えます。工学部委員会ではこの方針のもとで13年度は活動したいと思っております。

言葉足らずのところがあり、また具体性に欠ける話になりましたが、約束の紙面が尽きました。今回の特集を契機に広報活動のあり方についての議論が沸いてくることを期待しています。

☎ (0836)85-9211

E-mail : morita@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

農学部における広報活動



加藤 昭夫
 教授
 農学部長
 生物資源科学科

本学部では学部としての広報活動を意識的、組織的に行っていないのがこれまでの状況です。しかしながら、農学部を市民に公開する目的で公開講座や市民フォーラムのかたちで継続的に広報活動を行ってきました。また、昨年は連合大学院の広報活動の一環として、教官の研究内容を中国新聞に掲載して頂き、広範な人々に本学部の実態を知ってもらえる機会を得ました。昨年6月から今年の3月まで、週一回のペースで、生物資源科学科のほぼ全教官の研究内容が分かりやすく説明され、反響が大きく、大阪方面の読者からの問い合わせもありました。昨年からさらにはさらに出前講座を小中学生・高校生に開始し、いくつかの学校から申込みがあり、大変好評です。これまでに行われた出前講座のタイトルは「大気のコロニー」「遺伝子組換え作物」「獣医さんの仕事」「日常の化学」などです。小中学生・高校生に話すので大変分かりやすく話すことが必要であり、先生方のご苦勞も大変だと思えますが、理科好き(農学部好き)の子供を増やすという崇高な目的で、多忙にもかかわらず、先生方にご協力してもらっています。今後もこうした広報活動は継続していきたいと思っています。

これまでの単発的に行ってきた広報活動を学部レベルで組織的に行うために、本年度から広報委員会を学部長、評議員、各学科長を含むものとし、積極的に活動を行う体制を整えています。私達はこれまで広報活動の意義・重要性について無頓着であり、高校生・市民に本学部の実像を伝えてこなかったという反省に基づいて、こうした体制を整えました。

今後、予想される国立大学の独立行政法人化に備えるためにも、広報活動は極めて重要であると考えています。とくに農学部ほどその実態が市民に知られていない学部はないといっても過言ではありません。共通教育で新生に講義をすると、毎年のように、「農学部で遺伝子組換えの研究やっているんですか」と驚いたように質問されるのには、こちらが驚

いています。農学部が21世紀の生命科学の一翼を担う学部であることは市民はもちろんのこと高校の先生も知らない状況が反映されています。また、環境保全に農学部が貢献している実態もあまり知られていません。何よりもグローバルな視点からの食料問題の解決に貢献している実態も知られていません。これは明らかに大学・研究者の側の広報が行われていないことの裏返しであると考え、積極的に広報活動を展開する予定です。

最後に、今年は高校生向けの農学部の広報紙を作成する予定ですので、その一環を紹介し、本稿を終わらせていただきます。



21世紀を迎え、私達人類は地球規模での食糧不足、環境破壊に直面しています。人口の爆発的な増加による地球の負の遺産は大変なものになり、食糧、環境問題は人類の生存を左右しかねない重要な問題になろうとしています。地球規模で人口が増加することにより、自然界の資源供給能力が限界に達し、食糧資源の枯渇化が生じます。また、森林破壊、オゾン層破壊のように、地球規模での環境破壊が生じます。こうした人類の危機的状況を回復することが農学部には課せられた課題です。農学部ではこうした、地球レベルでの環境保全、食糧確保のために、バイオテクノロジー、遺伝子工学、環境科学、情報科学を駆使して、人類の将来を切り開く研究が行われています。具体的には(1)自然環境に調和した新しい食糧生産技術開発、(2)生物機能の開発と応用、(3)自然生態系の保全・修復、(4)動物の医療、多面的機能開発・利用、(5)人間の健康と生活社会環境の充実などの教育・研究が行われています。皆さん方が農学部に入っただけ、皆さんの若い力と意欲で、人類的な課題を解決するために活躍されるよう願っています。

保健学科(医療技術短期大学部)の広報活動と将来展望



上田 順子
講師
医学部保健学科基礎検査学講座

経緯と過去…

医療技術短期大学部(医療短大)での前任者の退官により、急遽、委員に任命され半年が過ぎようとしている中、広報活動の実態について調査を求められました。当初、案としてだされた、広報について考える座談会は中止になりました。そこで、今回、広報活動のありかたについて執筆を求められましたが、この号が発刊されるころには現在の委員会はなく、新広報委員会が発足し活動しているはずですが、しかも、医療技術短期大学部は医学部保健学科へ移行しているため、これからは医学部として活動を共にすることになります。この投稿は俄委員をはじめ医療短大広報委員の総意をまとめた最後の直球になりそうです。



医療短大時代には「心に愛を 手に技を」という、医療従事者としてのモットーをかかげ、心にひびく学生募集用冊子がありました。その他、各学科の学内実習の様子を撮影した紹介ビデオもつくられ、オープンキャンパス時のPRに貢献していました。もち

ろん、学部PRには、学生部委員の高校訪問や就職担当教官の病院・会社訪問などの影の力も大きいと思われます。医療短大のホームページ(HP)は学生有志により作成・管理されていました。そのような中で、やはりマスメディアの力は大きいと思われたのは、研究内容をマスメディアに取り上げられた教官のもとで、あるいは学部で学びたいと志して入学してきた学生もいたからです。

現在と未来…

保健学科になって半年、広報活動は医学部の一学科として活動を開始しています。まず、HPは各講座の教官が管理し、内容の充実に取り組んでいます。PRパンフレットのテーマは「輝く未来を目指して」に大きく変わりました。大学案内(素心無限)の一ページを飾り、学生部委員や就職担当教官のPR作戦も続いています。これら作製したパンフレットの内容はHPにも即時掲載すべきだと考えています。また、情報を掲載したHPアドレスは各パンフレットや冊子へもれなく記載した方がよいと思われます。しかし、実際のところ、我が保健学科では、HPの作製を教官が片手間に行っているためPR的センスに欠け、内容の充実・修正に時間をかけることが難しくなっています。必要最低限で取り組んでいるのが実情です。そのようなHPでは学部や講座の魅力を引き出せないでしょう。アクセスの多いHP作

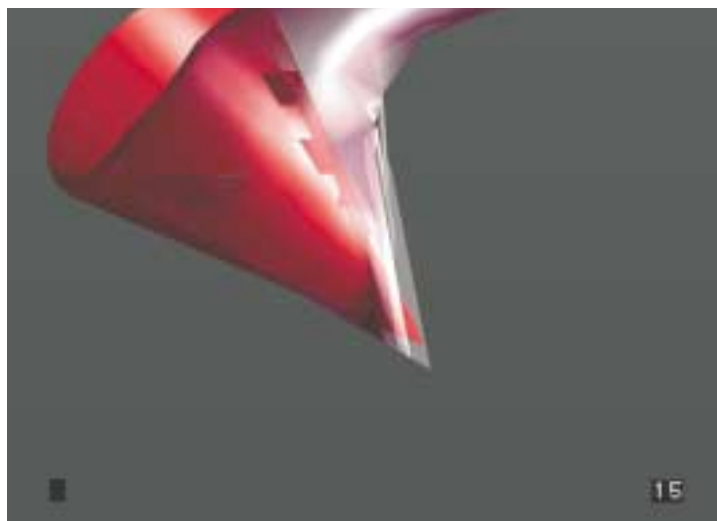
成は本学科の緊急な課題です。また、山口大学に広報活動を専門に行う広報部を設け、情報を扱う専門家を配置し、各学部・講座のHPの充実化を図るなど、質のよい情報を提供していくことが望まれます。独立法人化されれば大学の経営活動は重要で、中でも学生・地域社会に対しての広報活動は大切です。その際、これまでのように足並みが揃わないと前に進めないという活動ではなく、経営に連動して柔軟に広報活動を行えるようにすべきであると考えています。

広報委員会が発刊し続けてきたYU Informationの利用度はかなり低く、情報誌としての必要性を感じないという声が多く聞かれます。1発刊あたり50万円を超える予算をかけ、一部の関係者にしか読まれずに捨てられていく悲惨な現状があります。YU Informationのような広報誌は、学生よりもむしろ大学PRのために学外に提供すべきであり、学内へはHP掲載で充分という意見も多いのではないのでしょうか？YU Informationは季刊誌とする、発刊と同時にHPに即時掲載するなど、情報の提供方法に工夫が求められます。

これからは山口大学の広報活動を効果的・効率的に充実させるためにも、情報メディア(Internet・TV・新聞等)を積極的に利用し、イベントニュースを外部に提供していく必要を強く感じています。

☎ (0836)22-2833

E-mail : jueda@yamaguchi-u.ac.jp



山口 信右 工学部感性デザイン工学科 2年

T O P I C S

大学院医学研究科紹介

医学研究科に新設された独立専攻 「応用医工学系」について



河野 道生

教授
 大学院医学研究科応用医工学系
 生体シグナル解析医学講座

本年（平成13年）4月に新たに医学研究科に独立専攻「応用医工学系」が開設されました。日進月歩の医学・医療とグローバル化する競争的環境の中で、個性ある学際的教育研究活動を推進するために、従来の固定的な医学の専門分野に限らない医学と工学との融合連携した研究科組織がわが国で初めて構築されました。

これまで医学・医療における先進的で画期的な展開は、医学分野以外の領域からの新しい理論・技術の導入によるところが大きいのも明らかであります。山口大学の医学部と工学部においては、地元の石油化学及びバイオ関連企業を含めた産官学連携の協議

会、例えば「山口県の医療福祉産業を考える会」、「うべ医療福祉産業研究会」、「宇部・小野田地域産学官連携協議会」等に数多く参画しております。また、地理的な利便性もあり、医学部教官と工学部教官との共同研究プロジェクトも数多くの成果を挙げましたし、更に大きく発展しております。このような背景と必要性により、今回の医学と工学との融合した新しい大学院の立ち上げとなりました。

応用医工学系の組織は、医学部の3つの講座と工学部の2つの講座とで2つの基幹講座「生体シグナル解析医学」「バイオマテリアル医療工学」を、医学部の4つの講座と工学部の2つの講座で2つの協力講座「デジタル情報制御医学」「バイオセンシング機能工学」を構成しております。

応用医工学系の視点は、現在の医学・医療分野でのゲノム研究の先を見据えたポストゲノム研究に置いております。つまり、遺伝子の情報を研究することから更にその先の、その遺伝子がつくる蛋白の働きの情報をとらえる研究です。ヒトの身体は外界及び生体内のいろいろな情報を受け取り、それに対応して生命活動を行なっています。脳は主に見る、聞く等の五感を神経を介して認識統合しています。しかし、生体の情報、つまり細胞、あるいは分子レベルでの情報はこれらとは比べものにならない莫大なものです。この生体情報が乱れると、いろいろな病気（癌、糖尿病、高血圧、心疾患など）が起こりま

応用医工学系 (Applied Medical Engineering Science)

	大講座名	研究分野 (旧学科講座)
基幹講座	生体シグナル解析医学	シグナル伝達情報学 (医・生化学第2)
		細胞シグナル解析学 (医・寄生体学)
		分子病態解析学 (医・内科学第3)
バイオマテリアル医療工学		生体医療工学 (工・機械工学)
		生体材料工学 (工・機能材料工学)
協力講座	デジタル情報制御医学	デジタル細胞制御学 (医・生理学第1)
		器官病態内科学 (医・内科学第2)
		器官病態外科学 (医・外科学第1)
		遺伝子診断学 (医・臨床検査医学)
	バイオセンシング機能工学	
生体分子工学 (工・応用化学工学)		

定員： 博士前期課程 37名
 博士後期課程 16名

T O P I C S

す。本応用医工学系では、細胞及び分子レベルでの情報、つまり生体情報シグナルを感知する方法を開発あるいは伝達機構を解明するとともに、それらをデジタル解析する方法を確立して、いろいろな病気の病態解明さらにそれらを利用した先端的な医療機材・機器の研究開発を目指します。これらの研究開発に必要な創造的で幅広い視野をもつ人材を育成します。

このような視点からの教育・研究の成果は、病気の病態把握をさらに詳細に明らかにできるし、病気の状態を患者一人一人で詳しく把握できます。その治療も患者一人一人のオーダー・メイド的なものとして行なうことができます。一方で、生体情報を感知する医療機材・機器の開発が促進できるでしょう。病気・病態としては、骨髄腫や消化器癌を含めた癌、糖尿病、高血圧症および心血管病変などを中心に生体情報シグナルの解明が進められています。つまり生体情報シグナルのデジタル化を基に、特許になりうる新しい発想と患者さんに非侵襲的でやさしい機器の開発がおこなわれてゆくことが大いに期待されます。

TEL (0836)22-2341

FAX (0836)22-2237

E-mail : mkawano@po. cc. yamaguchi-u. ac. jp

Home page : <http://www.yamaguchi-u. ac. jp/~igakubu/index.html>

山口大学大学院 医学研究科
応用医工学系
 (博士前期課程, 博士後期課程)
平成13年4月新設

**最先端の
医療技術の創造**

**医学部, 工学部を含む広い分野から
学生を募集します**

出願期間: 平成13年4月2日(月)~5日(金)
 学力検査: 平成13年4月13日(金)

〒755-8505 山口県宇部市南小原1丁目1番1号
 山口大学医学部学務課
 TEL 0836-22-2068 FAX 0836-22-2099
 URL <http://www.yamaguchi-u.ac.jp/~igakubu/>



写真：応用医工学系シンポジウム「未知なる生体情報シグナルへの新たなる挑戦」での講演（平成13年3月8日）写真：演者は文部科学省高等教育局医学教育課長 村田貴司 氏です。

T O P I C S

東アジア研究科[博士後期課程]紹介

東アジアで活躍できる 指導的高度専門職業人養成を課題に

■ 藤原 貞雄 研究科長 教授 経済学部

山口大学の人文学部、経済学部は、東アジア研究には伝統もあれば研究陣にも厚みがあることから、東アジア研究科設置の準備に力を注いできました。幸い念願かなって東アジア研究科(博士後期課程)を本年4月に発足させることができました。

日本、中国、韓国、アセアン諸国等を含む東アジア地域は、21世紀の世界で焦点になる地域です。この地域の国はそれぞれが長い歴史を有しており、言語、文化、宗教も多様ですから、国民の融和も難しい課題です。また膨大な人口を抱えた国では、どのように経済発展を進めていくのかという課題も容易ではありません。しかも東アジアに限らず世界全体が急速に変貌し、環境問題や資源問題など地球規模での課題に对应していかなばなりません。したがって、東アジア地域の課題に深い理解を備え、しかも柔軟に対応できる指導者を養成することは、日本だけではなくこの地域全体の課題でもあります。本研究科はその課題の応えること、つまり、東アジアで活躍できる指導的高度専門職業人を養成することを目的にしています。

本研究科の概要、協力講座や連携講座も

東アジア研究科は、独立研究科で1専攻(「東アジア専攻」)で、「比較文化」「社会動態」「社会システム分析」「東アジア経済」という4つの教育研究領域がおかれています。前二つが基幹講座で、社会システム分析は協力講座、東アジア経済は連携講座となっています。

比較文化領域は中国文化論、現代東アジア論、日本文化論の3分野に分かれ、東アジアの思想歴史、言語、文化、社会に関する教育研究を、社会動態は、経済、経営、法律の3分野で東アジア社会の変化とそれによって起こる問題の解明・解決策の探求を行い



ます。社会システム分析は、分析手法を教育研究し、問題解決にあたる実践的能力の向上を図ります。また東アジア経済は、学外・海外の研究調査機関と連携交流して、より具体的・実証的な東アジア経済について教育研究を行います。

コース制・基盤演習・プロジェクト演習に特徴

本研究科は入学定員10名ですが、社会人、留学生が多いことを想定して(8割程度)、3年間でしっかり教育研究を行い、課程修了と同時に博士号の取得が可能なように教育システム/プログラムに配慮しているところに特徴があります。

学生は、まず「比較文化コース」「開発政策コース」「企業経営コース」のどれかを選びます。それと同時に学生毎に3人の複数指導教官が決まります。1年次には形成持論・基盤演習が設けられています。いずれも学生の主観的な願望にとどまっている研究計画を問題領域の中に位置づけ、何をどのように研究しなければいけないかを理解できるようにする、いわば研究の客観化が目標です。

2年次以降には特別講義とプロジェクト演習が配されています。これらは、いずれも学生の研究課題

TOPICS

に沿った具体性の高いプログラムです。ワークショップやフィールド調査を含む演習は、いずれも専門分野の異なった複数の教官と学生が議論をしながら問題を発見し、実践的で柔軟な問題解決の思考法を修得させることを重視しています。

15人が合格、多数が社会人学生

本年度は、募集期間が短かかったにもかかわらず、21名の応募者があり、15名が合格しました。13名が

社会人で、平均年齢37.9歳、最年長者は69歳の女性、外国人留学生は3人でした。多くの社会人合格者は、やはり勤めながら修士課程を修了されており、このため年齢が高い割には修士課程修了後年数は1.7年と短いのが特徴です。論文審査、口述試験での印象では、研究計画はきわめて意欲的で「東アジアで活躍できる指導の高度専門職業人養成」という本研究科の目的に沿った学生を迎えることができたと確信しています。

人文学部「生涯学習」紹介

人文学部の生涯学習計画の概要

——大学としての特徴を生かした地域社会との連携を目指して——

■ 岡光 一浩 教授 人文学部言語文化学科

基本構想

平成10年10月の大学審議会答申は、「21世紀を目前に控え、高等教育を取り巻く社会状況の変化は一層厳しく、高等教育に対する社会の期待もますます高まっていくものと考えられる。21世紀初頭の社会状況の展望の上に立って、今なすべきことを明確にし、更に大胆かつ積極的に推進していかねばならない」とし、大学が社会的存在として十分に社会に開かれ、社会に対して責任を果たすことを強調しています。そしてさらに、「高等教育を取り巻く21世紀初頭の社会的状況の展望等」のひとつとして、「生涯学習需要の増大」を挙げ、「高等教育機関は、幅広い年齢層の人々の知的探求心にこたえて必要なときいつでも学習できる、より開かれた場となることが求められていく」としています。

人文学部はすでに、学部が「より開かれた場」となるために、社会人入試や編入学、科目等履修生制度の実施、ならびに県民・市民を対象に大学の内外で公開講演や公開講座を行ってきましたが、それらの場においてしばしば、人文学部の学問分野に対する強い関心と興味が多く寄せられました。そしてそれらは一様に、人文学部の学問が、人間が人生観や

世界観を作り上げるためには欠かせない、誰でもが身につけておかねばならないものであり、現代のような成熟した産業社会においては人間としてぜひとも修めておくべき事柄である、というようなご趣旨のものでありました。私たちは県民・市民の方々のこうした生の声を耳にするにつけ、人文学部の学問を、新しい発想のための教養の保持やこれからの高齢化社会に見合った充実した知的精神的余暇活動のために、もっと外に向かって開放していくことの重要性を改めて強く自覚することとなりました。幸いに、私たちの人文学部には、そうした地域社会の様々なニーズに応えることのできる貴重な教育資源が人材的にも施設設備の面でも総合的に存在していることを改めて確認し、学部が「いつでも誰でも学べる」「より開かれた」生涯学習の場となるよう更なる検討を進めるために、平成12年3月学部内に生涯学習計画検討ワーキンググループを発足させ検討を重ねてきました。その当初の検討には、なぜ大学は開かれなければならないのか、どのように開かれるべきか、なにゆえに大学における生涯学習は必要なのか、大学における生涯学習とはなにか、どのように進められるべきか、といった哲学的根拠の究明が必要でし

T O P I C S

た。そうした点が明らかにされなければ、大学は社会人の本格的な学習の場とならないと考えられたからです。

私たちは、大学の、そして学部の特徴を前面に押し出した大学らしい地域社会との連携を目指すことを基本構想と致しました。そしてそこには、私たちの研究成果は学生に対する教育という形で伝達され



るだけであってはならない、長年の知の蓄積は大学の中に溜め込むばかりであってはならない、多くの人に役立つものでなくてはならない、そのようにして社会と触れ合うことによって、大学の教育・研究は新しい活力を得ることができるという考え方が潜んでいると言えましょう。

実施事業

人文学部は、学部のもっている資源を大学と地域社会の連携や大学の地域社会への貢献に役立てるために、平成13年度より次のような「生涯学習事業」を実施します。

- (1) パンフレット「出前講義」の作成と講師の派遣
 平成13年2月、人文学部の教官が大学の外に向いて講義する「出前講義」のためのパンフレットを作成し、自治体の催しや公民館活動に、また高校生への知的向上心の刺激のためにご利用願うよう、県内市町村の教育委員会と公立・私立の高校、県寄りの島根県、広島県、北九州の高校に送付しました。このパンフレットには、人文学部全教官の専攻、講義可能な領域、テーマの一例、地域での活動などを掲載しています。3月末日時点で、すでにかかなりの数の講義依頼がきております。なお、このパンフレットの内容は人文学部のホームページにも記載されています。
- (2) 生涯学習講座「やまぐちサタデー・カレッジ」の開講

平成13年3月、社会人と学生と一緒に学ぶ生涯学習講座「やまぐちサタデー・カレッジ」のパンフレット及びポスターを作成し、近隣の市町村教育委員会、公民館、高校、報道機関などに送付しました。このパンフレットには、開講講座のご案内、講義担当者による講義シラバス、受講のご案内などを掲載しています。従来からの「公開講座」を改める形で構想されたこの講座では、5月より土曜日の午後、人文学部教室において、大学の講義や演習に近いよりアカデミックなものを、社会人と学生と一緒に学んで双方向の交流を目指すことが意図されています。大学がその特徴を生かした生涯学習の場となるためには、大学はただ単に、大学教育を外に向かって提供して社会のニーズに応えるだけでなく、社会人の「体験知」と学生の「学校知」とが会うことにより、地域社会と大学の相互関係が築かれことを目指すべきだと考えるからです。人文学部の学問分野を、「やまぐち学コース」「異文化交流コース」「現代文化コース」「日本文化コース」「外国語学習コース」の5つのコースに分け、大学レベルの講義を地域社会に向けて大々的に開放いたします。13年度は前期3コース、後期2コースをそれぞれ8回或いは15回開講しますが、社会人には受講料を聴取し修了証を発行しますが、山口大学学生は無料とし、人文学部学生には卒業単位に含まれない単位として成績簿に表記します。なお、この講座の内容も人文学部のホームページに記載されています。



- (3) 地域社会の生涯学習事業との連携
 13年度より徳山市教育委員会主催の徳山市生涯学習センター「徳山オープンカレッジ」の生涯学習講座への講師の派遣を行い、地域社会の生涯学習事業の推進に協力します。
- (4) サテライト教室の開設

T O P I C S

徳山市の徳山駅ビル取得に関し、平成12年12月、徳山市役所企画部より「徳山駅ビルのカルチャーセンターに予定している3階をサテライト教室として人文学部に貸与したい」という申し出を受け、前向きに利用することを決定していますが、その利用の仕方は現在検討中です。

(5) 情報メディアによる生涯学習講座の開講

大学全体の構想の中にある問題ですが、学部としても今後検討する予定にしています。

要望・問題点

最後に、人文学部の生涯学習構想や実施の中で問題となった主な点を簡単に記しておきます。①予算

の確保と充実（開かれた大学への期待がますます増大している中、なによりも理解をお願いしなければならない。昨年度は宛名書きの作業や調査、PR等はWGメンバーの献身的な努力によって担われました。）②講義コマ数の軽減化（負担増ではなく、すでに他大学で行われている講義の「公開授業」化も検討すべきです。）③公開講座の担当を教育業績として評価する。④社会人の受講しやすい環境の整備。⑤（すでに20以上の大学で開設されている）「センター」の新設。

☎ & F A X (083)933-5259

E-mail : okamitsu@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

先端工学を出張サービス！

高等学校への「出前講義」

■ **森田 昌行** 教授 工学部 広報・国際交流委員長

大学教員や企業研究者が小中学校や高等学校に向いて講義をする、いわゆる「出前講義」については、最近多くの機関で実施されるようになってきました。山口大学工学部では、これまで「出前講義」の要請に対しては各学科あるいは各教員が個別に対応してきましたが、平成13年度からは工学部全体として「戦略的に」実施することにいたしました。すなわち、若者の「理科離れ」の傾向を少しでもくい止める方策の一つとして、また進路決定を控えた高校生については、とくに工学の面白さを知ってもらいたいとのねらいから、広く工学全般にわたった「講義メニュー」をそろえて高等学校（の生徒）に提供しようと考えたからです。

このような戦略的背景には、高等学校（とりわけ普通科クラス）の教諭に工学系学部の出身者が極めて少ないという現実があります。つまり、進路指導の先生自身が、「工学部とはどんなところか」、「工学部ではどんなことを学ぶのか」、「大学院での研究とはどんなものなのか」など、あまりよくわかってい



ないということをよく耳にするからです。ですから、工学部の出前講義は（実際は生徒対象ですが）高等学校の先生に対する啓蒙という観点からも重要であると考えています。

一方で、18歳人口の年ごとの減少は国立大学といえども受験生の確保を次第に難しくさせてきており、今後は受験生に「山口大学の工学部」を強くアピー

T O P I C S

ルする必要に迫られてくるでしょう。そこで、平成13年度は、工学部を受験する生徒が多い西日本地域の高等学校を対象として「出前講義」実施することにしました。4月はじめに各高等学校へ案内状を送付するとともに、新聞紙上でも発表し、また大学のホームページにも実施要領などを掲載しました。

工学部には現在約200名の教員がおりますが、13年度は工学部の全分野から27名の講師（教授、助教授、専任講師および助手）を講義題目とともにリストアップしています。高等学校からは希望の講義題目（講師）を選んで申し込んでもらうという方法を採用しました。また講義メニューには掲載されていないテーマでも、講師の都合がつく限り、できるだけ高等学校の要望に応えられるような体制をとることにしています。

この原稿執筆時点（高等学校への案内から2週間足らずの間）でも、多くの問い合わせと講義申込みが寄せられ、担当者は講師のスケジュール調整に追われているところです。受験産業からの情報を待つ

までもなく、「大高連携プログラム」（大学と高等学校の交流および情報交換など）は今後ますます重要になってくると思われます。「出前講義」はそのようなプログラムの重要な部分であるとわれわれは認識しています。そういった意味でも、この「出前講義」にかける意気込みは大きく、高等学校の要望等を聞きながら講義メニューを適宜更新し、次年度以降も継続的に実施していく計画をしています。

「出前講義」の申込みは年間を通じて随時、電話およびFAXで受け付けています。問い合わせ、申込先は下記の通りです。また案内と申込み方法はホームページにも掲載されております。

申込み・問い合わせ先

TEL (0836)85-9003 FAX (0836)85-9016

E-mail : EN282@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

(企画・広報担当：前田)

URL : <http://www.eng.yamaguchi-u.ac.jp/Delivery/>

時間学研究所

山口大学に出来た新しい研究所、 時間学研究所

■ 井上 慎一 時間学研究所所長 教授 理学部自然情報科学科



みなさんは時間というものについて考えたことがありますか。時間とは絶対の力を持ちながら、とらえることの出来ない、不思議なものです。毎日忙しいとき、時間がもう少しあればよいな、と誰しも、

思います。取り返しのつかない失敗をしてしまったとき、時間を逆戻りさせたいと、本当に芯から願います。でもこればかりはどんなお金持ちでもどうにもなりません。昨日という時間はどこへ行ってしまったのでしょうか？明日とか未来というのはどこからくるのでしょうか？果たして本当に時間は流れ

ているのでしょうか？時間の長さはそのときの気持ちで長くなったり、短く感じられたりすることは誰しも経験することです。楽しい時間は早く過ぎてしまいますが、ただ待っている時間や、苦しい時間は同じ時間の長さでも、とても長く感じられます。例えば電車を待っている5分はとても長く感じられるのに、夢中になって遊んでいる5分はすぐに過ぎてしまいます。このような違いはどこからくるのでしょうか？ちょっと前にヒットした映画に“Back to the Future”というのがありますが、いつかはタイムマシンに乗って、あのよう過去と未来を自由に行き来することが可能になるのでしょうか？アインシュタインの理論に基づくと、それにはちゃんとした科

T O P I C S

学的根拠があるという人もいます。宇宙がビッグバンによって誕生したという理論はよく知られていますが、それではビッグバン以前の、宇宙もなかったときには時間もなかったのでしょうか？ だいいち、時間のない世界とはどんなものか想像がつかますか？ このように、時間ということを考えてみると、とても不思議なことばかりで、研究する理由が十分にあると思いませんか？

山口大学に時間のことを研究する研究所を作ろうという話が持ち上がったのはもうすでに3年も前のことになります。大学がただ、二十歳前後の学生の専門教育をしているだけでは許されなくなったという社会の要求の変化をうけて、学長の廣中平祐先生が、山口大学に他の大学にないものを作ろうと、呼びかけられました。廣中先生がこの新しいタイプの研究所に求めた条件は1) 東大や京大にはない、山口大学でしかできない、ことを目指すこと、2) 学部や専門分野を横断した研究を行うこと、3) 大学の外にも開放されていること、の3点でした。幸いにも時間を対象とした研究所を作ろうという、この計画が採用され、2000年4月に時間学研究所が誕生しました。この秋には新しい建物の中で時間学研究

所の活動が始まります。時間を研究の対象にする研究所は今までどこの大学にもありませんし、サビエルによって、日本に最初に西洋時計が持ち込まれた地である山口にふさわしいものです。

時間学研究所は、一言でいえば、21世紀の新しい価値観の創造を目指しています。20世紀はいわば物の時代でした。貧困と病気を克服し、物が豊富にあることを価値として社会が組み立てられてきました。ところがそうした価値観は限界に近づいています。現代社会の複雑な仕組みについてゆくだけで、強いストレスを感じ、心の健康を失う人がたくさん出てきました。物が豊かになっても、いっそう物がほしくなる飢餓感だけが残り、幸福の実感が遠のいているとも言われます。物を大量に作り出すために、生活から自然が遠のき、環境が汚染され続けています。この様なことはすでに多くの人が指摘していますが、それでは物の豊かさに代わる、新しい価値をどのようにして作るかという方法になると、誰もはっきりした答えを持ち合わせていません。我々も答えを持っていませんが、その答えを、「時間を豊かにする」という側面から考えれば、得られるかもしれないと考えたのです。従って、時間学研究所は単に時間を定



公開講演会ではフロアーの市民からも活発な意見が述べられました。
(12月10日の時間学研究所講演会「時間は生命の乗り物」での風景)

T O P I C S

義したり、時間を操作したりすることを目的にしているわけではありません。私たちが日常暮らしている時間を豊かにするにはどうしたらよいかを知るために時間を研究しているのです。

時間学研究所には山口大学にあるすべての学部から先生が参加しています。その研究の範囲も哲学や文学、民族学から、生物学、物理学に及びます。他の大学の先生も参加しています。研究は、今のところ、4つのプロジェクトに分かれて行われています。脳と時間のグループは医学、生物学畑の先生が集まって、脳の活動から時間が認識されるメカニズムを研究しています。基礎論グループは哲学や、文学、宗教の先生が集まって、時間の定義を追求しています。エイジンググループは老人が豊かに生きるために社会の体制はどうあればよいかを研究しています。4つ目の環境と時間の関係を研究するグループは生物

の行動における日周性や季節変動を研究しています。今年中にはさらにいくつかのプロジェクトが採用される予定です。

大学は若い学生を教育し、立派な人間として社会に送り出す使命を持っていますが、教育はただ、学生に授業をし、試験の成績をつけていけば達成できるというものではありません。時間学研究所で行われているような、一見すぐには役に立たない、教育とは直接関係のない活動が一生にわたる影響を与えることもあります。毎月、時間学研究所で行われているセミナーには大学院生や学部生が多数参加しています。これらの学生がきっと、時間学を心優しい人間のための学問として発展させてゆくことに大きな貢献をしてくれるようになることを期待しています。(ホームページ：www.rits.yamaguchi-u.ac.jp)

サバティカル報告

サバティカルを終えて

■ 小粥 良 教授 教育学部国際理解教育



99年10月～2000年9月までの一年間、サバティカルでオーストリアのウィーンとフランスのパリに滞

在しました。ウィーンでは9か月間、ウィーン大学の図書館を利用しながらオーストリア文学の研究、パリでは3か月間、ユネスコ教育セクターの文書センターを利用して国際理解教育に関する資料の収集と研究を行いました。

ウィーンに着いた頃にちょうど総選挙があり、極右と言われるハイダー氏を党首とする自由党が第二党に躍進し、第三党に転落した国民党と手を握って連立を組むのではないかと危惧されていました。国民党は長年、社会民主党と連立与党の側にあったのですが、多数派社会民主党の陰で積年の不満を抱えていたようです。社民党の長期政権によって、コネ社会オーストリアの中で社民党政権と関係の深い団体や社会層が得をする一方、その恩恵から締め出されている人々の不満がつのっていたことが、自由党躍進の背景としてあるらしい。国民党党首クレスティ

TOPICS

ル氏の動向が注目される中、彼はなかなか真意を見せないで、時を稼いでいるかのようでした。しかし、恐らくは、選挙前から全とお膳立ては整っていたのではないかと疑われます。なかなか進展の無かった政局は、2月になって急展開し、結局、自由党と国民党は連立を組み、シュツセル氏が首相となったのです。

この時期にウィーンにいたことは、私にとって貴重な体験でした。毎日、新聞や雑誌の記事に興味をもって読みました。テレビでもさまざまな討論番組があり、ニュース番組は連日のように、ウィーン市で行われたデモの様子を報道していました。オーストリア人がEU内の他の国々で差別的待遇を受ける事件が頻発したり、ドイツ人の芸術家がウィーン国立歌劇場の真ん前で新政権を挑発するようなパフォーマンスを行って、さらにテレビで自由党の政治家と罵り合うなど、ニュースを追う者たちを飽きさせません。ドイツ人芸術家の行ったパフォーマンスとは、国立歌劇場の真ん前の路上にコンテナを置き、その中で不法滞在の外国人労働者に、何日か外界との接触無しに暮らしてもらうというものでした。中の様子はモニターで見ることができます。コンテナの上には自由党の党旗が翻っていました。実は、その旗が掲揚された瞬間に、私はたまたま国立歌劇場の前を通りかかったのです。歓声と拍手に驚かされて振り返ると、コンテナの上に翻る自由党の旗、そして「外国人は出ていけ」の横断幕。私はすっかり胸糞悪くなって、頭を振りながら、その場を立ち去ったの

です。しかし、部屋に帰ってニュースを見ると、なんと、それは反自由党のパフォーマンスだったと判明したのです。

ウィーンでは、ヨーロッパの色々な地域から来た人々と知り合いました。特に、ウクライナ、ロシアから来た人々とは大変親しくなって、ウィーンの中のウクライナ系移民の世界も垣間見ることができました。私の住んだ20区は19世紀の昔から移民がまず最初に住み着く地区でしたが、現在でも、市電に乗っているとさまざまなスラブ系の(と思われる)言葉が聞こえてきます。

ウィーンでのもうひとつの貴重な出会いは、オーストリア人の30代の映像作家、エドガー・ホーネットシュレーガー氏との出会いでした。彼は、日本に8年住んだ経験から、日本についての映画を3本ほど撮りました。普通の映画ではなく、現代芸術家によるフィルム・エッセイといったところなのですが、その最近作二本の作成・編集・字幕翻訳に深く関わらせていただき、これも大変貴重な経験でしたが、このことはサバティカル報告会では触れませんでした。このような本来の研究からはみ出した部分の経験が、実は大変貴重なものでした。二本の映画は、2000年1月と2001年1月のロッテルダム映画祭でそれぞれ上演されました。私の名前も翻訳者として映画のクレジットに出ています。

ウィーンで始めたロシア語の勉強もかなり進み、この夏はロシアに行って語学研修を受けてこようかと考えているこの頃です。



T O P I C S

TOEIC表彰制度

2000年 TOEICの成果は!!

■ 阿座上 真美 助手 経済学部経済法学科

山口大学が全国の国立大学に先駆けてTOEIC・I Pテストを1994年12月に導入して6年が経ちます。この間、29回のI Pテストを実施し、総受験者数4785名(内学生受験者数4733名)に及びました。

TOEIC (Test of English for Intemational Communication) は、社会が認める世界共通の英語能力認定試験で、県内では受験が困難であったため、山口大学経済学部「TOEIC実行委員会」をたちあげ、全学部学生・教職員の受験を容易にしました。

一昨年から導入されたTOEIC・I P表彰制度による、成績優秀者の表彰が今年1月～2月にかけて行われました。表彰制度(暦年)は、全学部を対象とした「学長特別賞」(歴代トップ賞一過去の最高得点者955点)、「学長賞」(860点以上1名)、事務職員対象の「事務局長特別賞」(730点以上1名)、「事務局長賞」(600点以上1名)、経済学部生を対象とした「鳳陽会(同窓会)理事長賞」(730点以上1名)、「同支部長賞」(730点以上で理事長賞に次ぐ2名)、経済学部長賞(在学中300点以上の伸び、600点以上10名)です。

2000年の受賞者は下記のとおり。
 「学長特別賞」－TRANAH TUYEN(経済・院生)
 「学長賞」－中村素子(教育・4年)
 「鳳陽合理事長賞」－編重科憲(4年)
 「同山口支部長賞」－工藤慎治(4年)
 の4名です。

経済学部では今年度よりTOEIC・TOEFLによる単位認定制度を導入するとともに、1年生全員の受験を義務化した。単位認定は450点から基礎外国語科目「英語」1単位を、以後得点によって、最高では教養外国語科目「教養英語」、専門科目「コミュニケーション英語」の数単位までが得点によって認定されます。また、1年生のTOEIC受験について、平成13年2月現在の受験率は98%です。

TOEIC・I Pテストの照会先：
 経済学部商品資料館・阿座上 真美/(083-933-5508)



TOPICS

東アジア国際シンポジウム

経済学部 of 伝統的研究成果を地域へ

■ 大庭 平四郎 経済学部東亜経済研究室係



経済学部は、1905年に設置された山口高等商業学校（経済学部の前身・山口経済専門学校を経て現在の山口大学経済学部となりました）の創設当初から、東アジア地域の研究に力を注いできました。そして、多くの優れた研究成果を生み出し、優秀な人材を養成してきました。

この伝統は約1世紀が経過しようとする現在も引き継がれており、東アジア研究は、経済学部の特色となっています。研究と合わせて資料の収集や地域間交流も精力的に取り組んできました。こうした活動は、1933年に設置された「東亜経済研究所」が中

心的に担ってきました。学部の3階にある「東亜経済研究所」の書庫には、中国や韓国など、東アジア関係の資料が豊富に所蔵されており、質・量ともに全国屈指のコレクションとして高い評価を得ています。

山口大学はアジアの三大学（中国・山東大学、タイ・カセサート大学、韓国・公州大学）と学術交流協定を締結しています。経済学部では、さらに、三つの大学（韓国・仁荷大学校経営大学、中国・遼寧大学経済管理学院、中国・復旦大学日本研究センター）との学部間協定を締結して、学術交流を深めながら研究を進展させています。

現在、東アジアは世界的な注目を浴びる地域となっており、地域間国際交流も急速に進展しています。地理的に重要な位置にある山口大学が、東アジアの学術文化拠点を目指して活動することは、将来を展望するうえでも極めて重要なことだと考えられます。

1994年から毎年開催している「東アジア国際シンポジウム」は、こうした情勢認識をふまえて、経済学部が、東アジア諸国や地域社会との研究・協力をおとして蓄積している成果を地域に還元することを目的としてはじめられました。また、東亜経済研究



T O P I C S



吉松 秀幸
 (国際東アジア研究センター
 主任研究員)
 「東アジアのグローバル化：
 その実態と問題点」

彦田 義郎
 (JETRO山口貿易情報
 センター所長)
 「東アジア経済と山口県の
 貿易・海外直接投資」



古澤 公章
 (元・味の素中国現地法人社長)
 「中国における日系企業経営」

松田 熙
 (日本在外企業協会常務理事、
 元・東芝シンガポール社長)
 「日本企業のASEAN
 現地法人の経営と人材管理」



コーディネーター
 古賀 武陽
 経済学部教授

所を、それを担いうる拠点にふさわしい施設としてより一層充実・発展させることも重要な課題とされています。

昨年度は、2001年1月27日(土)に「東アジアのグローバル化と日本の企業」をテーマとして開催しました。これは、新世紀の扉がアメリカ・スタンダードによる世界のグローバル化が進行する中で開かれたこと、21世紀が「アジアの世紀」といわれる時代の幕開けを、アジア諸国と日本の企業がこうした情勢にどのように対応したらいいのかについて討論を深めようと考えたからです。パネリストと報告テーマは次のとおりです。また、コーディネーターは本学部古賀武陽教授が務めました。

大学会館ホールに溢れる参加者と、討論への質問が多数寄せられたことから、今回のテーマへの参加者の関心の高さがうかがえました。討論では、グローバル化への対応方法やインドネシアにおける「味の素」事件もあってか、アジア地域への企業の進出に係わる疑問が多く出されました。

経済学部では、今後も年1回のペースでシンポジウムを開催し、経済学部と山口大学の地域への貢献をはかるとともに、学部の東アジア研究をさらに充実させたいと考えています。

シンポジウムの内容は「東亜経済研究」特集号として発行しています。経済学部以外の方で興味のある方は附属図書館で「東亜経済研究」をご覧ください。

☎ (083)933-5507

E-mail : EC196@office. cc. yamaguchi-u. ac. jp

T O P I C S

国際交流

外国人留学生懇談会

■ 原田 和子 総務部国際主幹付留学生係長



山口大学外国人留学生懇談会は、本学に在籍する外国人留学生と外国人研究者を激励し、交流を促進するため、学長主催により実施され、留学生の増加に伴い、昨年度は約250人が参加するなど

年々賑やかになっています。

2000年度は、副学長制度も始まり、大学の改革が急ピッチで進んでいます。山口大学の将来には国際交流が欠かせないと認識が高まり、留学生をもっと受入れること、本学の日本人学生が世界に通用する国際人になるための施策が求められています。そのためにも近い将来の留学生センターの設置が大きな目標です。

2000年度留学生懇談会について、吉村 弘副学長のご指導の下、次の方針が決まりました。

1. 学生の企画によること
2. 留学生と日本人学生との交流
3. 地域の方々との交流

方針1)開催日は、2001年1月23日16時からと決まり、懇談会の企画については、留学生からは山口大学留学生会の顧令儀(中国)、李柄三(韓国)、Noora Binti Ali

(マレーシア)のみなさん、日本人学生からは、教育学部国際文化学科3年生の大谷世津子、岩中真由子、竹重文佳里、高橋尚未、多賀谷明子、照屋真弓、原田 綾のみなさんが集まって協力して企画実行しました。

方針2)外国人留学生・研究者・その家族・関係の教官だけでなく、留学生のチューターの日本人学生は勿論、国際交流に関心のあるその他の学生及び教職員の皆さん全員にご案内しました。その中で事務局施設部の有志の皆さんから、日本古来の餅つきをお見せしたいという申し出があり、急遽プログラムに加えることになりました。

方針3)本学の留学生が大変お世話になっている国際交流協力団体の方々、山口県・山口市・宇部市の国際交流担当の方々にご案内しましたが、大変お忙しい中を多数ご参加いただきました。本当に有難いことです。

こうしてできた当日のプログラムは次の通りです。

第一部 大学会館 大ホール

司会 永野 蘭(教育学部3年・日本)
李 柄三(経済学研究科1年・韓国)

①日本文化紹介

邦楽部・吟詠部による琴の演奏・剣舞

②パネルディスカッション

「21世紀の大学生活をより豊かなものにしよう」



T O P I C S



パネリスト

OToolc, Jonathan

(人文学部特別聴講学生・アメリカ合衆国)

Folinusz Ibett(教育学部特別聴講学生・ハンガリー)

檜垣 剛(教育学部3年・日本)

福田華絵(教育学部2年・日本)

Rizzute,Dale(経済学部特別聴講学生・オーストラリア)

Mohamad Faizal Bin Osman

(工学部1年・マレーシア)

何 継方(工学部2年・中国)

徐 建華(農学部研究生・中国)

③感想 今田 淳 教育学部教授

第二部 第二学生食堂

司会 西田幸平(教育学部3年・日本)

Noora Bmnti Ali(経済学部4年・マレーシア)

①廣中平祐学長挨拶

②顧令儀留学生学生会会長挨拶

③吉村弘副学長・留学生委員会委員長挨拶

地域国際交流関係の御出席者の紹介

④鎌田賢事務局長乾杯の挨拶

⑤懇談

⑥餅つき大会

⑦村田秀一副学長・国際交流委員会委員長閉会の挨拶

今回は例年にもまして大変多くの方々が登場され、



第一部会場の学生会館大ホールは、満員の盛況でしたし、懇親会会場の第二学生食堂は外国人留学生・研究者・家族のカラフルな民族衣装であふれ、日本人学生、教職員併せて450人を越える大盛況となりました。餅つきは、最近では日本人でも見る事のない石臼と杵で賑やかに行われ、留学生や家族が交代でつき、餅を丸め、つきたてに黄粉や大根おろしをつけて頬ばり、おみやげに持ち帰るなど大変好評でした。

新年度を迎え、山口大学の外国人留学生は200人を越えました。4月中には、新たに独立研究科博士後期課程東アジア研究科及び医学研究科に 응용医工学系が設置され、留学生はさらに増える見込みです。留学生センターの新設もいよいよ視野に入ってきました。

また、大学間交流協定校である、韓国の公州大学とは12年度から計4人の1年間の学生交流を実施していますが、8月には双方7人ずつの学生が互いに1週間、相手大学を訪問し、互いの言語と文化を学ぶ計画をたてています。

今回の留学生懇談会が、普段留学生に接しておられない方も含めて、本学の国際交流へのご理解を深める一助となれば幸いです。

☎ (083)933-5028

E-mail : SH032@office. cc. yamaguchi-u. ac. jp



T O P I C S

国際交流

シェフィールド大学訪問記

- 三原 敏秀 工学部 教務係
- 河本 直哉 工学部 電気電子工学科技術官



留学生担当 Debora greenさんと(中央：三原、右：河本)

山口大学工学部では、事務系職員(技官、教務員を含む)を対象に平成10年度から交流協定を締結している大学へ派遣し、国際的視野を広げる制度が設置されています。

本年度は英国・シェフィールド大学に派遣させていただきました。

ロンドンに着いた当日、アクシデントに見舞われました。ヒースロー空港から地下鉄ピカデリー線にのり、キングスクロス・セントパングラス駅で乗り換え、シェフィールド行きの列車に乗り込まなければいけないのですが、同駅で列車が停まらず、次の駅で下車せざるを得ませんでした。どうすればよいかを同行した河本さんが同時に下車した乗客に尋ねてキングスクロス・セントパングラス駅までバスで引き返すことになりました。

さらに、訪問先のシェフィールド行きの列車が渡英1週間前に脱線事故を起こし、4人死亡、35人の重軽傷者がでたためにシェフィールド行きの列車はすべて1～2時間遅れとなっているという出来事にも遭遇しました。直接の原因は、線路の保守点検不足による脱線だそうですが、どうもそればかりではなさそうです。在来線でも200キロぐらい速度を出すのは日常的だそうで、列車が遅れているのも100キロ前後のスピードしか出せないことが原因だというこ

とです。日本でいえば在来線で新幹線が200キロで走行しているようなものだからむちゃくちゃです。その事故のため、キングスクロス・セントパングラス駅で2時間近く列車の到着するのを待ちました。後日、ロンドン大学に留学している知人の大学院生に会った折、このことを話したら、キングスクロス・セントパングラス駅で列車が停まらなかったのは、ラッシュアワー時には同駅に利用客があふれてしまうので、わざとやっているのだそうです。また、イギリスの鉄道は民営化されて以来、非常に国民の評判が悪い。時刻どおりに列車が運行されないのは日常茶飯で、事故も多い。私も体験した、停まるべき駅に列車が停まらない、どこのプラットフォームに列車が到着するのかも来てみないとわからないなどのトラブルは、当初は国民性なのかと思っていましたが、原因は、分割民営化の仕方にあるそうで、細分化しすぎたことにあるといいます。我慢強いロンドンっ子もいかげん我慢の限界に達しているのだそうです。

ところで、私の渡航目的は、独立行政法人のモデル国といわれているイギリスの大学の現状を視察することで、山口大学の将来像を考えたいと思ったからです。副学長の村田秀一先生の計らいで、ドゥルハム大学の樋口さんと山口大学工学部にも在籍されたことのあるシェフィールド大学のAdrian F.L. Hyde先生に通訳をお願いすることができ、決して充分とはいえませんが、しかし、充実した研修になったと自負しています。

研修の内容は、留学生関係と設備視察、そして大学の運営をもっぱら質問しました。留学生の受け入れ数は約3000人だそうで、この数は我が工学部の学生数に匹敵します。驚いたのは、これら学生に対して奨学金の支給および寄宿舎の提供を全員に保障している、ということです。大学所有の寮もかなりあるし、なければ民間アパートを借り上げてでも提供

T O P I C S

するとの説明。一般の学生にも1年生全員に宿舎は提供するということがシェフィールド大学が伸びた一因だそうです。後ほど車で大学施設や寮を案内してもらったが、図でしめされるように大学は町の中に混在しているといった感じで、塀などの明確な区分けもあまりありません。お昼に連れて行ってもらったパブも大学の施設かと思ったら、一般のお店だと説明されました。それくらい自然に大学と街とが融



福利厚生施設(内部、すべて大学関連グッズ)

合している、あるいは、互いに必要不可分の存在になっている、というべきでしょうか。大学内の福利厚生施設にしても同様で、そこには、パブもあれば銀行もある、ライブハウスだってある、といった具合で、学内で飲酒禁止を検討しているというどこかの日本の大学とは大違いです。こちらでは学生を大人扱いしている、学生も日本人学生と比べて大人なんだろう、と私が感想を述べると樋口さんもそのとおりだと思うといっていました。帰国後に大坂工学部長へ「大学の環境整備については、シェフィールド大学と山口大学の学内環境は、大きな差があるというわけでもない、ただ、大学の存在する地域環境がすばらしく、大学は地域の中での環境を考えて整備を行なっている、あるいは利用している。地方都市の商店街の地盤沈下が指摘されて久しいが、いろいろ事情があるにせよ、日本の国立大学は大店規正法で大型店の出店が規制されていた時代から先陣をきって郊外に移転した。」と報告しました。

11時過ぎから、Mike Holcombe工学部長と面談。時間の制約もあり、能書きはやめにして、大学の運営の実際について聞きたいことをずばり聞きました。

シェフィールド大学でも国からの補助金は、80%台から50%台に大幅に低下しており、「自助努力」が求められているのが現状とのこと。5年毎に外部評価を入れ24段階評価しています。実際に成果のあがらない学科は、大学側との協議の結果、成果をあげるにはあまりにも財政負担が重い、などの理由で廃止

に追い込まれた学科もあります。リストラも現実に行なわれています。50歳くらになった教授でも成果があがらないと大学側が判断したときには、年金等の割増などの手段を使っていわゆる「肩たたき」を行なっています。そうして得意分野に特化してきたとのこと。「シェフィールド大学は、大都市に位置して、都会志向の学生をひきつけることに成功しています。山口大学は地方の小都市に位置していて魅力がなく、Reserch大学として生き残れないのでは。」と私が質問してみると、「Lancaster, York, Woridk, Exeterなどの小都市に位置しているにもかかわらず、Reserch大学として成功している大学もある。要は特徴があることが大事だ。」とのこと。「イギリスの学生は偏差値だけで大学を判断するのではなく、学生1人あたり教官数を気にする」ともいっておられました。

シェフィールド大学での視察を終えてロンドンに帰った後、翌日ぜひ行ってみたいと思っていた大英国博物館を訪れました。ホテルを離れて地図を頼りにロンドンの街を歩くのは不安でしたが、そんなことをいってはいられません。大英国博物館にたどり着いた時はなるほど地図どおりだ、と後で考えると



クリーンルーム

当然なことなのだけれど、その時は妙に感心しました。すこし自信もつきました。大英国博物館で感心したのは、展示数の内容・数もだが、にもかかわらず入場料が無料(ただし、自国通貨でよいのでいくらかの寄付金を入れるおおきな箱は入り口付近に置いてあります。もっとも、まじめに寄付しているのは、事情をよく知らない私のような観光客くらいだったけど…)なうえに写真はとり放題。日本では考えられません。イギリスの「エージェンシー制度」は日本の「独立行政法人」のヒントになったといわれていますが、イギリスの「エージェンシー」は、省庁の内部組織であって法人ではありません。大学や博物館、研究所などの教育、研究、文化施設とは何の関係もありません。日本では先陣を切って国立博物館、

TOPICS



福利厚生施設（外観）

美術館は独立行政法人化したのが、果たしてそれよかったですか。ただ、「エージェンシー化」されていないというシェフィールド大学でも国からの補助金は、80%台から50%台に大幅に低下しており、「自助努力」が求められているのが現状だ。仮に民営化の道が正しいとしても、やり方を誤れば、失敗するというのが、英国鉄道から得られる教訓だろう。そんなことをおもいながら、ロンドンを後にしました。

長々と駄文を記してきたが、このような研修機会をあたえてくださるにあたり、尽力を尽くしていただいた、大坂工学部長をはじめとする関係者の方々に深く感謝の意を述べたいと思います。

工学部教務係 三原敏秀

シェフィールド大学視察における大部分については、先に三原さんが述べられているので、私は、まず電気電子工学科を見学した様子について述べたいと思います。

シェフィールド大学工学部電気電子工学科では、私が半導体関係の研究室に属している技官であるためか半導体関係の実験設備についての紹介をされました。透過型電子顕微鏡(TEM)や走査型電子顕微鏡(SEM)などの紹介の後に、クリーンルームへ案内をされました。このクリーンルームには半導体デバイス(トランジスタやダイオードなど)の製造工程が一通り揃っており、オリジナルの半導体デバイスを作ることができるということでした。主に、青色発光素子の研究に使われているようでした。また、これらの設備については日本で言うところの「科研」のような制度によって賄われているようでした。

シェフィールド大学を訪問して強く感じたことは、自分たちの仕事が「ビジネス」であるという認識が強いことでした。そして、英国における人気大学No.1であるシェフィールド大学は「ビジネス」における所謂「勝ち組」であるということです。

「ビジネス」であるという考えは、例えば、留学生の受け入れに対する考え方に印象的に現れていました。シェフィールド大学では数千人単位で留学生を受け入れるなど、山口大学では考えられない数の留学生の受け入れをしています。それは、英国で学ぶ間、英国に学費を払い、英国に家賃を払い、英国に食費を払う留学生は、見方を変えるならば、「知識の輸出」をしていることと等価であるとの考えを背景にしているようです。事実、英国政府もそのような観点からの見解を大学の国際関係の部局へ示しているそうです。今までそのような考え方をしたことが無かったので、やはりここはイギリス…資本主義の本家本元なんだと、変に納得してしまいました。

また、シェフィールド大学の「ビジネス」における「勝ち組」たる所以は、①英国のちょうど中心にあたり、親元から離れてみたい学生にとって近すぎず遠すぎずとちょうど良い距離であること、②シェフィールド自体が大きい街であるということ、その割に近くに国立公園があり自然にも恵まれているなど…「立地環境の良さ」と、③大学内に“University Union”(日本で言う大学生協)などの厚生設備が充実していること、④新入生への宿舎の保証…など「生活環境の良さ」、最後に、⑤教官の質の高さなどが挙げられるようです。

改めて言うまでも無く日本の地方国立大学を取り巻く環境は、少子化時代の到来、更には独立行政法人化などを背景に厳しさを増しております。これからも「山口大学」が生き残り、更に発展していくためには、シェフィールド大学における「ビジネス」的な考え方は、ひとつの重要な鍵となるのではないかと思います。

我々にこのような機会を与えて下さり、お世話して下さいました山口大学の関係者の皆様、そして、暖かく迎えて下さったシェフィールド大学の関係者の皆様、特にシェフィールド大学工学部のエドリアン・ハイド先生におかれましては、我々をシェフィールド駅への送り迎えのみならず奥様と共にご自宅へ暖かく迎えて下さるなど、視察全般に関して細部にわたりお心を砕いて下さいました。また、英国ダーラム大学のToru Higuchi先生には、シェフィールド大学において英語に不慣れな我々の通訳を引き受けて下さいました。皆様のおかげで今回の我々の視察は大変楽しく実りあるものになりました。最後に深く深く感謝の意を表します。

技術官 河本直哉

口の中の病気



■ 篠崎 文彦 (教授 医学部 歯科口腔外科学)

口の中の病気は多彩である

病気が多彩という表現はあまりにも好ましくないかもしれないが、本当に多彩なのです。むし歯からガンまでと私はよく言っているが、なかなか理解してもらえませんが。学生の中には医師になるのにむし歯のことや口の中の病気を学ばねばならないのかとげんなり顔をしている者もいます。

医学部附属病院には現在診療科が18科、それに総合診療部、救命救急センターなど5つの部門があり、それぞれ専門領域の患者さんを診たり、教育も研究も行っていきます。私達も顔、口、頸などの病気を専門とし、学生教育もこの領域の疾患、治療等について講義や実習を行っています。

医学教育は今大きな転換期を迎えており、講義中心の授業をできるだけ少なくして患者さんを診て判断することや、医の倫理、患者中心の医療を推進して行くうえでの資質や感性を養うような授業が取り入れられようとしています。講義はあくまでも基礎知識を取得して、患者さんの病態や苦しみ、悩みを考えさせどう解決してゆくかの力を養うことの助です。

口の中にもガンができる

医学部の講義ではスライドをよく使い、多くの疾患や研究を目に訴えて理解させることが多いのです。私も90分の授業のうち半分はプリントを説明し、残りは実際の症例を呈示して学生に疾患や治療法を印象づけています。口の中にもガンができるというどびっくりする者もあるが、わが国では全悪性腫瘍の3%くらいが顔、口、頸に発生するというから決してめったにないわけではありません。高齢者の人口が増えるとともにやはり悪性腫瘍も増えるのです。頻度が最も高いのがやはり舌ガンです。次に歯肉、口腔底のガンです。

結婚式で挨拶をさせられ、専門は口腔外科というどあまり理解されず、「航空外科」と思い込みをされ、「飛行機に乗って外科をやる医師」と考える人もあるようです。「口の悪い人は舌ガン」になります。私はこのような患者さんを治療しています。といえど大爆笑です。

口腔ガンの治療は患者さんに大きな苦痛を与え、

医師もまた苦難の連続です。告知の問題1つとっても、家族は本人に伝えることを拒んだりためらったりします。それでいて抗ガン剤を投与したり放射線治療を開始したりせねばなりません。副作用も多く、ガンを治そうとすることで口の中全体に口内炎でき、食事や会話ができないようになることもあり、これを説明し患者さんに理解してもらうのも困難です。手術で切除できたとしても小さな切除範囲であればそれ程問題はないが、大きければ咀嚼やえん下、会話などが障害され、あまりにも機能障害が大きすぎる。今言われています、Quality of life (QOL: 生活の質) は本当に低い。このようなことが判っていてもガン治療は強力にすすめるべきか…。ガンはあっても、あと数か月の命であっても、痛みなどの苦痛を取り去りQOLを上げ、「生」を全うすることが患者さんにとっては一番でないかと考えたりすれば、積極的治療か、消極的治療か、患者さん本人、家族に尋ねるのもあまりにも酷であるような気がします。

このようなことは講義では絶対に理解してもらえないし、卒後間もない医師も何とかガンを治そうとする心構えは失わせたくないし、ガン治療に関する研究も進めてもらいたい。医療は患者さんも含めて多くの医療従事者の忍耐と犠牲で成り立っている。一愛と奉仕の精神の持ち主でなければ良い医療はできない。

医学部では今後学生にノート型パソコンを購入してもらい、これで授業を行うことになっています。パソコンを使用することは時代の趨勢であるとは言え、定年間近な私達には何とも味気なく、一抹の不安を感じないわけではありません。ノート型パソコンの画面を見て授業を行うことは一見時代の先端を行き、素晴らしいことのように思えるが、現在のように授業に遅れてくる者、途中退室する者、私語をやめない者、携帯電話でメールのやりとりをしている者など、学生の態度にも問題があり、すべての学生が画面に向かっていっせいに授業についてくるとは思われません。コンピューター時代の到来で多くのことが人の手をはなれ、機械化されようとしています。しかし、これでよいのでしょうか。医療は心と感性が必要なのです。

英国小説へのアプローチ

■ 池園 宏 (助教授・人文学部 言語文化学科)



私の専門は英文学で、特に19世紀ヴィクトリア朝の小説を主たる研究領域としています。この時代の小説は時として巨大な山脈群に例えられます。歴史的に見れば英国が多大な進歩を遂げたこの時代は、同時に文学史上数多くの大小説家が誕生し、小説という文学の一形式が飛躍的に発展し確立された時期でもありました。チャールズ・ディケンズ、ブロンテ姉妹、トマス・ハーディなどは、おそらく日本でも割とよく知られている作家たちでしょう。ヴィクトリア朝は総じて繁栄の時代でしたが、“Victorian”という語を手元の辞書で引くと、「自己満足的な」「因襲的な」「偏狭な」といった否定的な語義が並んでいるのに気がつきます。当然のことながらこれらは20世紀的な視点に立った定義づけなのですが、文人たちは既に同時代の社会の矛盾点や問題点を自らの作品に様々な形で投影させていました。

そのヴィクトリア朝の作家群の中で私が特に関心を寄せているのは、ジョージ・エリオットという女流小説家です。日本での知名度は残念ながらそれほど高いとは思えませんが、わが国に紹介されたのはかなり古く明治の頃です。例えば、英国留学の後に大学で英文学の教鞭を執った夏目漱石は、彼女の三番目の小説『サイラス・マーナー』を講義で取り上げています。女性としては当代一の広い教養を持っていた彼女の作品は、いずれも奥深い思索的態度や精細な心理描写に溢れたものばかりです。高邁な倫理観を持っていたが故に、人一倍深刻に生きることの意味を問い続けたエリオットの姿勢は、そのまま作品の至る所に具現化されています。決して平易とは言えないその内容や文体を通して見えてくる彼女の思想や時代精神を、少しでも多く汲み取る作業に価値を見出しています。文芸批評家としての活躍も行って彼女が残した各種評論や夥しい量の書簡などの資料を吟味、検討する作業も、エリオット研究には不可欠な要素です。

しかしながら、実を言いますとここ数年は、全く趣の異なる20世紀の小説家ウィリアム・ゴールディングの研究にやや焦点をシフトさせていました。個人研究とは別に、私は10年ほど前から福岡現代英国小説談話会という研究会に参加しています。ここでは話題性のある今世紀の小説を中心に参加者全員で輪読を重ねているのですが、この会で特に力点を置いていたのが、ノーベル文学賞や英国ブッカー賞など数々の権威ある文学賞を受賞したゴールディングについての研究でした。その共同作業の成果は3年ほど前に研究書出版の形で一応の到達点を見たため、現在はエリオット研究に再度重心を移し、新たな心構えで個々の小説についての論考を進めています。ゴールディングは言語に対して非常に鋭敏な感覚を持っており、テキスト言説の背後にある意味の解釈を、読み手に対してかなりの度合いで要求する作家です。このようにタフな現代小説家に取り組んだ経験は、19世紀の作品を読む際にも直接間接的に役立つものと考えています。

さて、英国には70年の歴史を誇るジョージ・エリオット協会がありますが、日本でも4年前に日本支部が発足しました。会員は百数十人を数え、日本における研究活動はますます盛り上がりを見せている感があります。そのような刺激的状況の中、個人的な課題としては、ある程度評価の定まった作品はもちろんのことながら、文学的に高く評価されず等閑視される傾向のある作品についても、改めて解釈の光を当てる作業に取り組んでみたいと考えています。特に後期の小説の中には、作者自身の主知的、哲学的要素が深まるにつれて、逆に一文学作品としての資質の是非が問われることになったものが少なくありません。これらの作品に対しても自分なりの読み方を加え、ひいては作家としてのエリオットの全体像を把握する手だての一つとすることができればと思っています。そしてまだまだ遠い道のりではありません。

ますが、その延長でいずれはヴィクトリア朝の高い山々を一つずつ登り、この時代の文学世界を自分なりに俯瞰できるようになればと考えています。

☎ (083)933-5264

E-mail : ikezono@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



英国中部ナニートンにあるエリオットの銅像

私の研究

脳はどのようにストレスに対応しているか？ ストレスはうつ病をどのように誘発するのか？



■ 渡辺 義文 (教授・医学部 神経精神医学講座)

ストレスとうつ病

最近「うつ病は心の風邪」と巷間でよく言われるようになりました。ストレス社会だから、誰でもストレスからうつ病になる可能性がある、という意味で言われているようです。確かにバブルがはじけて不景気となって以来、自殺の件数は著しく増加し、交通事故による死亡数を上まわようになっていきました。このようにうつ病が市民権を得たことで精神科に対する従来の偏見が薄れたのか、「うつ」や「不安」を訴えて精神科を受診する人が年々増えています。

では、ストレスが重いと本当に誰でもうつ病になるのでしょうか？答えは否です。うつ病は発病し易さ(発病脆弱性)が遺伝的に規定されている脳の病気、と考えられています。言い換えれば、うつ病になりやすい人は生まれつき何らかのストレスに対する弱さを持っている、と考えられているのです。このストレスに対する生来の弱さは、その人の性格として表現されます。すなわち、責任感が強く、几帳面で頑張り屋、「～でなければならぬ、しなければいけない」と融通のきかない考え方、秩序を尊重し、周囲との協調を重んじ、評価を気にする性格というのが特徴とされています。このよううつ病になり易さは、脳のどのような変化からきているのでしょうか。そして、ストレスが加わることによって脳にどのような変化が起こり、うつ病になるのでしょうか。この疑問に対する答えはまだまだはっきりしていません。まさに、この疑問こそ私の研究テーマです。

脳内のストレス適応機構

うつ病の発病脆弱性、ストレス脆弱性について研究をするにあたり、まづ問題になったのは、ストレスの実体は何なのか、ストレスに対して脳はどのような変化をして適応していくのか、という基本的な問題でした。今でこそ神経科学の領域でストレスに関する研究は盛んになっていますが、10年以上前の段階ではこのような基本的問題に対する研究でさえあまり手がつけられていませんでした。そこで、

私はまづこの基本的な問題に取り組んでみました。

その研究の中で見出したことは、脳は毎日の繰り返しのストレスに対して3～7日で馴れてくる、という事実でした。ストレスによって引き起こされるいくつかの脳内の現象に共通して、ストレスに対する馴れがみられました。これこそが脳のストレス適応現象だと考えています。例をあげれば、ストレスによって引き起こされる不安がその一つです。ストレスによって動物は不安・脅えから行動に変化を示しますが、その変化はストレスを繰り返しているうちに消失していきます。他の行動変化として、摂食行動や性行動の減弱も同様の馴れを示します。脳内のストレスホルモン系として有名な視床下部-下垂体-副腎系は、ストレスに反応して活性化され副腎からのステロイドホルモンの合成・放出が増大します。この系も繰り返しのストレスに対して馴れを示し、ストレスによって増大したステロイドホルモンの放出が日を追うごとにすぐに抑制されるようになります。このことは、この系のネガティブフィードバック機能が亢進し、ストレス刺激による系の機能亢進をうまく抑制するようになったものと考えられます。

脳内の情報(興奮)伝達は電氣的・化学的に行われていますが、この神経興奮伝達の化学的指標として最初期遺伝子群のうちc-fos遺伝子がよく用いられています。c-fos遺伝子は通常の状態では脳内に殆ど発現していませんが、痛みやストレスなどの外部刺激に反応して一過性にその発現が増大します。このストレス刺激反応性のc-fos遺伝子発現の増大も、ストレス負荷が繰り返されるうちに脳内の多くの部位で減衰していきます。同様に、自律神経系と深く関連し、ストレス刺激によって強く活性化される脳内のノルアドレナリン神経系においても、ストレスの繰り返しによってストレス反応性の興奮は減衰するという馴れを示します。逆にストレスに対する適応が破綻をきたすと、脳内に大きなダメージが生じます。記憶や情動に関与する海馬という重要な部位では、神経細胞の樹状突起の萎縮が起こり、ひどい場合は神

経細胞が死滅していきます。

ストレス脆弱性とうつ病モデル

以上のようにストレスは脳内に様々な変化を引き起こし、脳はストレスに対抗して様々な適応的变化(「馴れ」)を産み出していることがわかってきました。うつ状態は、このストレスに対する脳内の適応(馴れ)がうまくいかず、破綻状態に陥った結果と考えられています。うつ状態において脳内にどのような異常な状態が出現し(病態生理)、治療薬である抗うつ薬はどのような機序でうつ状態から回復させるのかがうつ病研究の中心的なテーマですが、ヒトの生体サンプル(脳)の使用が不可能な現状では、動物モデルの開発がうつ病研究推進のうえで重要な課題となってきます。

これまでの多くのうつ病動物モデルは過大なストレスを長期的に負荷して、無理矢理にストレス破綻状態に動物を追い込んで作製されてきました。このような動物モデルの問題点は、それ自体が非生理的であることは勿論ですが、うつ病で想定されている遺伝規定性のストレス脆弱性を無視していることです。動物のなかで生来的にストレス適応が不良なものがあれば、その動物こそ発病脆弱性を有した理想的なうつ病の動物モデル候補と言えます。さらに、そのストレス脆弱性を有した動物に、通常の動物なら容易に適応できる程度の軽いストレスを負荷してストレス破綻状態を作ることができれば、そして、抗うつ薬によってそのストレス破綻状態を防ぐことができれば、うつ病モデルとしての妥当性が保証され、その動物モデルによってうつ病研究はおおいに進展すると期待されます。

このような考えから、私はストレス脆弱性を生来的に有する動物の発見・確認、もしくは周産期以前の操作によるストレス脆弱性の発現に取り組んできました。勿論ストレス不適應の指標には、上述したこれまで私が見出してきたいくつかの脳内適応現象を用いました。その結果、純系ラットFischer344ラットならびにWistar Kyotoラットが生来的にストレス脆弱性を有し、うつ病モデルとして有望であることを確認しました。さらに、妊娠第3週に軽いストレスを1週間負荷することにより(胎生期ストレス)、生まれてきた仔ラットは成熟した後にもストレス脆弱性を維持することが確認され、現在うつ病モデルとしての妥当性の検討を行っているところです。

以上のモデル候補動物を用い、ストレスによって脳内のどの部位にどのような変化が生じ、抗うつ薬がその変化にどのように解消・抑制するのか、形態的側面・遺伝子発現・神経活性など総合的に検討を進めています。このような研究からうつ病の発病脆弱性の遺伝子レベルでの異常、うつ病の脳内責任部位、うつ病の病態生理、抗うつ薬の薬理機序など山積しているうつ病研究の課題に対する解決の糸口が見出されるものと期待しています。

教授室 ☎(0836)22-2416

研究室 ☎(0836)22-2255

E-mail : yosiwat@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



教官著作書の紹介



「Engineering Geological Advances in Japan for the New Millennium」
 (オランダElsevier社2000年)

日本列島は大太平洋プレートとユーラシアプレートの境界部に位置し、大変地質が複雑で、地震や火山活動で代表される様々な変動現象が起きています。このことが大規模構造物の位置選定や耐震設計上、大変重要な意味を持っています。我が国では、高速道路や原子力発電所などの建設、地熱などの新エネルギー源の開発に関して、電力会社や国家がスポンサーとなった大プロジェクトが行われてきています。また、原子力発電所から出る放射性廃棄物の地層処分などが文部科学省や産業技術総合研究所などを中心に検討が続けられています。これらのプロジェクトに多くの地質技術者が関与し、岩盤調査や環境評価に重要な役割を果たしてきています。また、高温岩体発電や放射性廃棄物の地層処分の可能性について、応用地質学的な視点から、要素技術開発に精力が注がれています。本書は、これらのプロジェクトで得られた最新の研究成果を紹介しています。もちろん、日本において地質技術者が関与しているすべての研究内容を網羅しているわけではありませんが、我が国における応用地質学的な研究の現状を国内外の多くの研究者や技術者に理解して上で、新しい世紀において貴重な資料となることを期待しています。

金折 裕司 教授 理学部



「発達理解の心理学」 (ブレーン出版)

複雑多様化する現代社会において、子ども達を囲む環境は急激な変化を余儀なくされ、いじめや残虐な事件など、憂慮すべき諸現象も出現してきています。本書は、「21世紀は心の世紀」と位置づけ、心を中心としたこれからの社会のために、いわば発達心理学と人間の育ちの環境としての教育世界とを統合的に捉え、新しい時代に対応しうる発達科学の構築を目指したものです。主な内容は、人間発達と発達の原理、発達のパースペクティブ、子ども研究から発達心理学へ、知的発達と思考・記憶、人格的発達と適応、情緒的発達と動機づけ、社会的発達と対人関係、発達心理学的研究法となっています。また、国際化の時代を迎え、本文中の人名等に原語表記の原則を取り入れ、Keywordとしての心理学用語も英訳とともに脚注として記載しました。(共著者:堂野恵子)<255+vi>

堂野 佐俊 教授 教育学部



Electron Collisions with Molecules in Gases: Applications to Plasma Diagnostics and Modeling
 (Academic Press, New York, 2000年)

電子と分子との散乱によって起きる様々な現象は基礎物理化学として非常に興味のある問題を提供しているのみではなく、我々の普段意識しない日常の技術の基礎としてなくてはならない重要な役割を担っています。たとえば蛍光灯、レーザー光線放射線医療、薄膜生成、半導体製造等数え上げればきりがありません。特に最近、半導体の超微細で且つ高容量で製造する技術の確立にむかって、米国、日本、欧州各国の研究者、技術者のあいだで熾烈な競争がなされています。この技術開発の為には、電子と半導体製造用分子ガスとの間の相互作用過程を基礎から理解し、原子分子レベルでの反応制御に応用していく必要があります。この本では、電子-分子散乱過程の素過程の実験的現状、理論的現状、電子散乱の結果起きる分子解離過程、半導体製造容器内のシミュレーション研究、そして今まで分かっている電子散乱過程の確率データの編集、に項目を別け、現在までの知識、情報をまとめてあります。基礎物理化学研究者や様々な応用分野の研究者や技術者に有益な参考書となるでしょう。

季村 峯生 教授 工学部

教官著作書の紹介



「新経営情報化事典」(日経BP社1999年)

企業がIT(情報技術)を活用して経営革新を行っていくためには、毎日のように誕生する新しいコンセプトや事例を常に監視しておく必要があります。

経営情報化によって経営革新を行うため、「新潮流」「最新手法」「最新技術」という三つの切り口で、最新のIT関連のキーワードを簡潔にやさしく説明するとともに、最近の各企業の情報化事例を紹介したのが本辞典です。執筆に当たったのは日経BP社の「日経情報ストラテジー」誌の編集部スタッフ。

筆者(谷光)は、この辞典の巻末に掲載された「戦史に学ぶ情報戦略」(三話)を担当しました。この三話のそれぞれの題名は、①「経営の硬直化」「官僚化が新しい発達の芽を摘む」、②「ライバルを知り尽くすには『情報参謀』を育て、優遇せよ」、③「情報化はデータ収集よりも、分析や評価・判断を重視せよ」です。

①は新知識へ迅速、貪欲な関心を示した明治の先輩と、官僚化とセクショナリズム化が甚だしかった昭和初期の日本指導者層を対比しました。②は、情報専門家を大事にした米海軍と、情報関係部門を「腐れ士官の捨て所」と自嘲させた日本海軍との差を分析しました。③は、CIAの前身である戦略情報局(DSS)の創設とその創設者の働きを略述するとともに、アングロサクソン(英米)の情報にかける執念を描きました。

谷光 太郎 教授 経済学部



「現代科学知識人気問題450例」(北京科学普及出版社1999年)

本書は北京市青年連合会設立50周年をきっかけに、北京市青年連合会と北京市科学技術協会からの呼び掛けで編著されたものです。科学技術の新概念や新成果が頻繁に現れている世紀交替の時代に際し、筆者を含む多数の各分野の研究者が執筆を担当し、科学普及の観点に立ち、現代の科学技術における人気話題450例を取り上げ、分かり易いように紹介しています。本書は全部で560頁で10章からなります。それぞれ(1)生命と生物科学、(2)材料科学、(3)電子と計算機科学、(4)通信と制御科学、(5)医薬科学、(6)地球・海洋と天文科学、(7)エネルギー科学、(8)環境科学、(9)航空と宇宙科学、(10)数学・物理学と化学のように構成されています。筆者は第3章の電子と計算機科学の一部を執筆担当しました。

李 磊 元 助教授 理学部
現 助教授 法政大学



「待ち行列理論と計算機システム設計」(西安科学技術出版社1995年)

我々はコンピュータを利用するとき、その反応の速度に非常に関心を持ちます。コンピュータは人間の道具として人間が使い易いように設計しなければなりません。しかしながら、ほとんどのコンピュータはコンピュータの設計技術者の経験に基づいて設計されています。高速の中央処理装置を実現したとしても、メインメモリ容量の制限または外部記憶装置への転送速度の遅延などで、主記憶装置と外部記憶装置のデータ転送を待つ長い行列が形成され、中央処理装置の高速性を生かせない場合が多いのです。従って、高速の中央処理装置に対応できるように、大容量かつ高速転送できるような主記憶装置、及び高速化を実現した外部記憶装置は必要となります。言い換えれば、単純にコンピュータの各部品を組み合わせることにより、よい計算機システムを得ることは困難です。各部品間のデータ転送の通信量からシステム全体の最適状態を見つければなりません。これはハードウェアだけでなく、OSなどソフトウェア管理システムにも密接に関連しています。このような最適状態を研究する理論的な手法として、待ち行列理論が知られています。本書は待ち行列理論を利用して、理論上で計算機システムの最適状態を把握し、設計する一般的な方法を紹介しています。

李 磊 元 助教授 理学部
現 助教授 法政大学

「著作書の紹介」を公募します。お問い合わせは巻末担当係までお願いします。

新聞掲載された山大・地域から見た山大

11月

- ◆創部40周年高らかに
山大医学部軽音楽部公演（宇部：1日）
- ◆当世山大生気質（中国：3日、4日、5日）
人文学部の学生が中国新聞山口支社で就業体験（インターンシップ）
- ◆山口大学祭にぎわう（読売：6日）
学生らでにぎわうフリーマーケット
- ◆バイオサイエンスに挑むー山口大学農学部リポーター（中国：8日、22日、12月6日、13日、20日、27日、30日）
- ◆夏休み就業体験を報告
山大生30人「学生の甘さ」痛感（山口・毎日・中国：9日）
- ◆野菜やソーセージは裸売りー西宇部成人学級ー過剰包装を見直そう
山大助教授でドイツ人のレールさん（宇部：8日）
- ◆山口大学医学部の特別講演会（宇部：8日）
- ◆17日にハイテクシンポー山大工学部ー（宇部：10日）
- ◆若さ躍動医学祭
研究成果の発表もー吉村・早大教授が講演ー（宇部：11日）
- ◆産学共同研究で地域貢献 中国文化賞の松浦山大教授「開かれた大学に」（中国：11日）
- ◆いま、理学部がおもしろいー理学部のユニーク紙上講座ー（宇部：11月14日、28日、12月12日、1月18日、2月19日）
- ◆慢性心不全仕組み解明ー山口大チームーたんぱく質異常が主因 根治薬開発に道（読売：16日）
- ◆農学部が学科改編へ
来年度生命工学などに力（朝日：16日）
- ◆新世紀への工学ー工学部の紙上公開講座ー（宇部：11月2日、16日、30日、12月21日、27日、28日）
- ◆秋深し 冷え込みいよいよ一歩一歩冬の足音（朝日：16日）
- ◆夏日漱石テーマに 来月2日山口大が公開講演（西日本：22日）
- ◆大学体感進路決定参考に
山大経済学部 高校生に公開講義（中国・宇部：22日）
- ◆活断層ない地域でも直下型地震の可能性
山口大が調査報告（朝日・山口：23日）
- ◆103年前落下した「仁保いん石」飛散の破片と鉄粒発見ー理学部 三浦助教授らフォーラムで報告ー（山口・読売：25日）
- ◆山大生の起業家、来月誕生
農産物販売や農家会計サポートするHP開設（山口：26日）
- ◆山口大がパソコン教室ー講師も生徒も小学生ー（日経：30日）

12月

- ◆NPO法人「防災ネットワークうべ理事長」地域の防災力向上を 工学部三浦房紀教授（山口：4日）
- ◆感性生かした力作並ぶ
山大写真部作品展（山口：3日）
- ◆若者が好きな山口像とは（中国：8日）
山大生グループなど ビデオ作品募る
- ◆山口大ESS 英語劇で原爆の恐怖をあす「はだしのゲン」上演（中国：16日）
- ◆21世紀の手紙 メディア見抜く判断能力を

- 経済学部助教授 マルク・レールさん（毎日：20日）
- ◆一公立ホールへの提言ー効率運営へ情報開示を
山大副学長 吉村 弘教授（毎日：21日）
- ◆学生が園児ともちつき
教育学部学生8人（中国：25日）
- ◆患者ら和やかXマスのタベ
山大附属病院（山口：24日）
- ◆山口大東アジア研究科新設へ
大蔵原案内示 応用医工学系専攻も（山口：23日）
- ◆バーチャル山口大へようこそ
HPに教員・職員 1002人の素顔紹介（中国・山口・西日本・読売・毎日：29日）
- ◆教育学部長に熊谷教授（毎日・中国・朝日・山口：29日）

1月

- ◆TLO設立に温度差
山口大教官出資で有限会社（中国：6日）
- ◆バイオサイエンスに挑む 山口大学農学部リポーター（中国：1月10日、17日、24日、2月7日、14日）
- ◆加藤医学部長を再任（宇部：12日）
- ◆山大病院内図書室、感謝の1周年
延べ2千人利用心のオアシスに（宇部：13日）
- ◆県科学技術振興奨励賞 田中・山大教授を表彰（読売・中国：18日）
- ◆山口大 大学院に東アジア研究科
来年度から指導的人材を養成（山口・中国・毎日：18日）
- ◆理学部長に杉原教授（中国・朝日・毎日：18日）
- ◆山大医学部 4月から大講座制
共同研究推進 医療多様化に対応（山口：21日）
- ◆地域社会の中の大学ー国立大学の行く先どこへー
小谷典子 人文学部教授（朝日：21日）
- ◆いま、理学部がおもしろいー理学部で学んでいますー（宇部：1月22日、29日）
- ◆山大病院 最新の医療機器を視察
河村文部科学副大臣（山口・朝日・宇部：23日）
- ◆慢性心不全仕組み解明
山口大研究グループ「治療に道開ける」（山口：25日）
- ◆学生ら350人が聴講
山口で東アジア経済シンポ（山口：28日）
- ◆地域振興に向けて産・学・官連携
山口で新年交流会（山口・読売：27日）
- ◆油彩の肖像画などあすまで30点展示
山大教育学部の山本さん（山口：27日）
- ◆2次試験出願初日
山口大などに早速願書5通（朝日：30日）

2月

- ◆経営者の先輩に学びたい ベンチャー講座学生が今春設置
会社興し講師派遣 経済学部・金子さん（中国：2日）
- ◆LEDの街灯開発ー山大の田口常正教授ー消費電力、蛍光灯の半分（山口・朝日・中国・西日本：6日）
- ◆国公立大の2次試験出願
山口大は平均5.1倍（朝日：7日）
- ◆シリーズ 大学の先生ー山大経済学部ー（中国：7日、8日、9日、10日、11日、14日、17日、18日、20日）
- ◆日本心臓血管外科学会

- ◆ 山大 江里会長と廣中学長講演（宇部・読売：7日）
- ◆ 15日東アジア国際シンポジウム開催
ー山大経済学部ー（中国：7日）
- ◆ 地域に役立つ大学に ー山大運営諮問会議ー
提言書を学長に提出
（山口・読売・中国・毎日：7日）
- ◆ 人文学部日本語文化論コース「公開研究発表会」
（毎日：8日）
- ◆ バリアフリー改築で起業を目指す山大生
需要の開拓へ講習会を企画（中国：9日）
- ◆ 山口大がO入試
講義体験・レポート・1泊2日の面接
（中国・山口・朝日・毎日：9日）
- ◆ 人文学部長に田中教授を再任（朝日・山口：10日）
- ◆ 日本心臓血管外科学会会長 江里健輔さん
患者に優しい血管医療を（山口：12日）
- ◆ 山口大マンドリンクラブ 山口きらら博に参加
（山口：11日）
- ◆ 山口大附属図書館新館長に中村和行医学部教授が選出
（朝日・山口・中国：15日）
- ◆ 附属病院長に森松教授を選出
（中国・朝日・山口・宇部：16日）
- ◆ 20世紀象徴するコラージュも
山大教育学部卒業終了制作展（山口・中国：16日）
- ◆ バイオサイエンスに挑む
農学部レポート（21日、28日）
- ◆ 国内大学院初の「応用工医学系」4月から学生募る
3月8日、市民対象に公開シンポ（宇部：22日）
- ◆ 教員が大学の外に出向いて講義
山大人文学部が「出前講座」を企画（山口：23日）
- ◆ 医学部新設学科3.4倍
国公立大2次入試（宇部：26日）

3月

- ◆ ベンチャーをどう育成するか
山口大が政策研究会（防長：2日）
- ◆ 山大、今春の開校控え「応用工医学系シンポ」
（朝日・読売・中国：7日）
- ◆ 山口大獣医学科の前身
山口獣医専門学校青春のあかし刻む（中国：5日）
- ◆ 学生起業にその場で出資
山大で9日「オークション」 全国から20人が挑戦
（中国・読売：7日、中国・日経・毎日・山口：10日）
- ◆ バイオサイエンスに挑む
ー山口大農学部レポートー（中国・7日、14日、21日）
- ◆ 心筋梗塞の危険度判定ー山大教授らグループ開発ー
超音波測定で可能に（山口・中国・西日本：7日）
- ◆ 一足早く「サクラ咲く」
山口大で1400人に合格発表（毎日：9日）
- ◆ 山大的秋山教授油彩画26点展示
CS赤レンガ（山口：10日）
- ◆ おもしろいよ科学の世界ー理学部が公開講座ー
ジュラ紀の化石観察や電気実験（中国：10日）
- ◆ 新産業創出・発展後押し 山大センターが「育成研究会」
産官学の20人集い初会合（中国：10日）
- ◆ サイエンスワールド2001・未知への挑戦ー山大理学部ー
理科離れに歯止めを子供たちへ研究成果披露
（朝日：21日）
- ◆ 23日にセミナー
山大時間学研究所（山口：20日）
- ◆ 心ひきしめ社会に船出
山口大などで卒業式
（中国・毎日・朝日・読売・山口：24日）

- ◆ 山大教授再発警告「エネルギーの解放不十分」
（山口：26日）
- ◆ 大学と地域、双方向交流をー山大人文学部ー
5月から土曜大学開講（山口：31日）
- ◆ 芸予地震土砂災害ー山大調査団が緊急調査ー
震源から68キロ以内で発生（毎日：31日）

4月

- ◆ 卒研テーマを企業から公募
本年度から山口大工学部 産学連携さらに推進
（中国・朝日：2日）
- ◆ 変わる山大 ー人文学部が講座ー
土曜の午後文学学ぼう（朝日・山口：4日）
- ◆ 若い才能ベンチャーにー経済学部ー
学生起業家、山口で講座（山口・中国：5日）
- ◆ 山口大の先生出前講義
人文学部60人 高校、公民館へ（読売：6日）
- ◆ 「自分の個性発見を」山大で入学式
2721人が新生活第一歩（毎日・読売・中国・山口：7日）
- ◆ 芸予地震被害を共同調査
山口大・福山大など15機関の研究者
心理・地盤…1年かけ総合的に（中国：7日）
- ◆ AO入試へアドミッションセンター設置 ー山大ー
（山口・朝日：11日）
- ◆ 工学部の楽しさPRー山口大の教授ら27人ー
高校への「出前講義」始める（宇部：11日）
- ◆ 専門医、手術中即座に病理診断 顕微鏡を遠隔操作
山大と柳井の病院結び実験（読売：13日）
- ◆ 時間学はいかにして成立するか
山口大時間学研の講演から
物理学、哲学、心理学…解明に必要な多様な“道具”
国際基督教大学 村上洋一郎教授（西日本：12日）
- ◆ 山口大4学部でAO入試
小論文などで選抜（読売：14日・宇部：26日）
- ◆ 大学改革メールで論議
農学部 8高校から意見（中国：18日）
- ◆ 患部診断、遠隔動画で医学部附属病院が実験
パソコンで顕微鏡操作（山口・日経・西日本：18日）
- ◆ 「土曜大学」を開講ー人文学部ー
来月から 社会人や大学生ら対象（毎日、17日）
- ◆ 高速ネット」で遠隔医療
動画など双方向で情報を（宇部・毎日：18日）
- ◆ 高校に「出前講義」工学部が教官派遣
6県150校へ案内状郵送
- ◆ 芸予地震被災の古文書・資料教えて
山大』教授ら救出ネット（朝日・毎日・読売：22日）
- ◆ 開胸せず心臓病治療も
医学部開発 骨髄細胞注入、血管造る（読売：27日）
- ◆ 「東アジア研」15人が入学式
山口大大学院（朝日・中国：28日）
- ◆ 山口近辺の子育て情報
山大センターHP開設（山口：30日）

公開講座のお知らせ

講座名	開設期間	受講対象者	開催会場	問い合わせ先
現代文化コース「『星の王子さま』を翻訳で読む」	5月12日(土) ～ 6月30日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200
異文化交流コース 「東西文化交流の諸相」	5月12日(土) ～ 6月30日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200
外国語学習コース 「映画で英語を楽しもう」	5月12日(土) ～ 7月7日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200
木 工 入 門	7月20日(金) ～ 7月22日(日)	市民一般	山口大学教育 学部木材 加工実験室	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
保 育 材 実 習	7月28日(土) ～ 7月29日(日)	幼稚園教諭 保 育 士	山口大学 教育学部 12番教室外	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
教師のためのプレゼンテー ションスキルアップ講座	7月30日(月) ～ 7月31日(火)	幼稚園、小中高 校、特殊学校 等の教職員	山口大学教育学 部附属教育実践 総合センター	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
教師のためのホームペー ジ作成・管理・運営講座	8月2日(木) ～ 8月27日(月)	幼稚園、小中高 校、特殊学校 等の教職員	山口大学教育 学部附属教育実 践総合センター	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
理 科 実 験 講 座	8月7日(火) ～ 8月8日(水)	小学校教諭 中学校教諭	山口大学 教育学部 25番教室外	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
パソコンを利用して：難しい 英文を理解したり、発音を外国 人の発音に近づけよう	8月4日(土) ～ 8月12日(日)	市民一般	山口大学 メディア教育棟	農学部研究協力係 TEL 083-933-5810
少子高齢社会を めぐる諸問題	9月3日(月) ～ 10月22日(月)	市民一般	山口大学 経済学部 第一会議室	経済学部庶務係 TEL 083-933-5500
ヒューマンスクール ～心をつつめる～	10月3日(水) ～ 12月12日(水)	市民一般	山口大学 教育学部 22番教室	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
これからの日本の景気は どうなるか	10月4日(木) ～ 11月8日(木)	市民一般	山口大学 経済学部 第一会議室	経済学部庶務係 TEL 083-933-5500
やまぐち学コース 「山縣周南を読む」	10月13日(土) ～ 12月15日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200
外国語学習コース「中国語中 級読本－小品を味わう」	10月13日(土) ～ 12月15日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200

大学など地域開放特別事業のお知らせ

講座名	開設期間	受講対象者	開催会場	問い合わせ先
農場で体験 -作るよろこび獲るたのしみ- ①自分でお米を作ってみよう	6月3日(日)～ 10月14日(日) 期間中3日	小学生及び その保護者 (1名まで)	山口大学 農学部	農学部研究協力係 TEL 083-933-5810
②やまいもの収穫	6月1日(金)～ 11月3日(土)	小学生及び その保護者	山口大学 農学部	農学部研究協力係 TEL 083-933-5810
やまぐち再発見 突撃、 親子レポーターが行く！	6月9日(土)～ 9月22日(土) 期間中7日	小学生及び その保護者	山口大学 教育学部	教育学部庶務係 TEL 083-933-5300
夏休みジュニア科学教室	7月23日(月) ～ 8月31日(金)	小学5年生～ 中学3年生	山口大学	総務部企画・広報室 TEL 083-933-5076

第49回 日本心臓病学会学術集会

会期 2001年9月24日(月)、25日(火)、26日(水)

会場 広島国際会議場、広島県立総合体育館、
リーガロイヤルホテル広島

会長 松崎益徳
(山口大学医学部第二内科教授)

学術集会事務局

〒755-8505 山口県宇部市南小串1-1-1

山口大学医学部第二内科

第49回日本心臓病学会学術集会事務局

事務局担当：藤井崇史、三浦俊郎

TEL：0836-22-2339 (学会専用)

FAX：0836-22-2246

E-mail：jcc2001@convention.co.jp

URL：http://www2.convention.co.jp/jcc2001

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア. Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思いますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。

ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行	題名
第2行	氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行	（空白）
第4行	本文始まり
・	
・	
第40行	本文終わり (TEL _____)

2. ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511

山口市吉田1677-1

山口大学総務部企画・広報室

広報・調査係長 有吉義和

☎083-933-5007 F A X 083-933-5013

E-mail : yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

学外向けの刊行物を現在の3分の1に減らせとの提言が運営諮問会議からあったことを特集記事の中で紹介しました。運営諮問会議の提言はさらに続けて、学内の会議を半分に減らせ、書類も半分に減らせとあります。これを学内の何人の人が実現可能な目標だと思うのでしょうか？無理だと思うのは私だけでしょうか？どこまで実現できるかわからないし、それならばいっそ高めの努力目標を掲げておこう、という気持ちが運営諮問会議の委員の方々にはなかったでしょうか。

売り手が買い手と値段の交渉をするとき、最終的にはどうせ値切られるのであるから、最初は高めの値段をふっかけておこうというのは、誰もが考える常套手段です。

ひるがえって本誌の文章の中にも読者の受けをねらい、注目をひくための過剰な形容や誇大な表現はなかったでしょうか。

あくまでも提言は助言であり広報は宣伝でもあるので、いくらか誇大に書いておく方が、その効果は大きくなることも事実です。差し障りのない範囲内であれば誇大表現も目くじら立てることはないでしょう。

(小宮 克弘)

◎山口大学ホームページ http://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html

山口大学広報第五十五号

平成十三年五月二十一日発行

編集発行 山口大学広報委員会

(総務部企画・広報室)

住所 山口市大字吉田一六七七一

電話 (083) 933-5007

FAX (083) 933-5013

E-mail: yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

印刷 児玉印刷株式会社

広報活動専門委員会委員

小谷 典子 (委員長 人文学部)

坪郷 英彦 (人文学部)

福田 隆眞 (教育学部)

マルク・レール (経済学部)

小宮 克弘 (理学部)

東 玲子 (医学部)

森田 昌行 (工学部)

宇佐見晃一 (農学部)

善甫 宣哉 (附属病院)

専門委員

熊谷 武洋 (教育学部)

小林 邦和 (工学部)